



# サンデー・ナイト・リムーバー

前橋梨乃

公開版

*for Smart Phone*

## Contents

- 第一話 週末は乙女座気分
- 第二話 秋は嫉妬深く
- 第三話 初春は振袖模様
- 第四話 切り札はダイヤのクイーン
- 第五話 花言葉は初恋
- 第六話 ジュエリーは涙色
- 第七話 梅雨明けはアラベスク
- 第八話 蜜月は双子座気分

★タップすれば各章へジャンプします

第一話 週末は乙女座気分

金曜日、17時30分。

「ラ・カーサでフラメンコ聞きながらスペイン料理なんての、どう？」

「げ、何日だと思ってるの。給料日前だぜ」

「あーあ、情けない。せつかくの花金だっというのに」

安岡芳樹のデスクのまわりを華やいだ声を取り巻く。若い営業マン数人と事務の小泉真理が加わって、今日の飲み会の相談である。

「つばさ屋なんてどうだろ」

「あ、手羽先？ 食べたい」

安岡の提案に、真理が賛成するといういつものパタ

ーンで話がまとまり、それぞれが帰り支度を始める。

「谷沢さん、一緒にいかないですか？」

今年入社した新人の前田が、オンラインのワークステーションに向かって得意先リストの検索をしていた。谷沢淳一に声をかけてきた。

「いや、いいよ。今日はプライベートなアポイントあるから」

「あ、デートですか？」

「ん？：：ま、そんなところ」

淳一は、コンピュータのディスプレイから一時も目をあげずに答えた。

前田はもうひとこと言いたそうにしていたが、淳一のすげない反応に肩をすくめ、きびすを返した。

前田たちが、あれこれ冗談を言いながらオフィスを出ていく間、淳一はキーボードを叩き続けていた。

ただ一度だけ、安岡が真理と並んでドアをくぐる後

ろ姿に、ちらりと目をやりはしたが……。

そのあと部屋に残されたのは、淳一と課長だけになった。

課長は、デスクで、真理がまとめていった営業マンたちの個人別週報に目を通していている。

大和メデイカル株式会社。

医療機器をドイツやアメリカから輸入して、各地の大病院に納入している。営業第二課は、主にCTスキ

ヤンなど最先端の高価なメデイトロニクス分野を扱っている。

各病院の今年度の予算の細目も決定した今の時期は、総じて暇である。

週休二日制をとっているこの会社で、残業を強いられることもなく、課員にとっては一年を通して最も心はずむ金曜日というわけだ。

淳一が、検索したデータをプリントアウトしている

と、課長が声をかけてきた。

「谷沢君、君は彼らとはほとんどつき合わんのだな」

「え？ ええ。このリストをどうしても作ってきたか  
つたもんですから。それに：：ああいう学生サークル  
みたいな雰囲気って、どうも苦手なんですよ」

「うむ。君が仕事を、あくまでビジネスライクにとら  
えようとしているのは知つとるが、日本の企業は、そ  
れだけじゃつとまらんぞ」

「ええ……」

コンピュータのスイッチを落として立ち上がりながら、淳一はあいまいに返事をした。どうせいつもの話だ。

「君と安岡君は同期入社の中じゃあダントツの成績だ。その二人がうちの課にいるってことで、部課長会なんかで、僕も鼻が高いんだ。しかしな、君と安岡君じゃあ、はっきり言って同僚の受けという点で、ずいぶん

違いがあるだろう。これから二人とも管理職になっていかにやあならんのだ。そういうことも馬鹿にはできんぞ」

「はい。今後気をつけます」

淳一は、わざと生真面目な受け答えをした。

「いや、君の熱心さと営業力にはいつも感心しとるんだ。あえて苦言を呈させてもらったってわけだ」

淳一は自分のデスクに戻ると、今プリントアウトし

たリストをファイルの中に挟み込んだ。

べつに今日やらなくてもよかった仕事である。他の連中をやり過ぎすためだけにキーボードの前にすわったのだ。

「じゃ、お先に失礼します」

「うむ」

やはり、酒に誘いたそうにしていた課長を尻目に、淳一は社を出た。

金曜日、19時40分。

地下鉄と私鉄とバスを乗り継いで、淳一はやつと郊外の自分のアパートへたどり着いた。

まわりには、宅地造成はされたものの、買い手が見つからずに放置されたままの空き地がたくさん残っている。

何と言っても、交通の便の悪さが問題だった。

淳一は、どうしても広い部屋が欲しくて、その点の不便さには目をつぶったのだ。

小さな幼稚園との間に道をはさんでぽつんと建つこぎれいな二階建ての賃貸アパート。そこが淳一の住まいだ。

淳一以外の住人は、新婚か、子供たちにここをあてがわれた淋しい老人たちである。

途中のターミナル駅のマーケットで買い込んだ食料

品の袋をふたつ下げて、淳一がアパートの外の階段を上がろうとしたとき、一階のドアが開いた。

「あ、こんばんは」

このアパートで淳一が唯一言葉を交わす、下の階の初老の婦人だった。名前は、相原佳代といったはずだ。

彼がこのアパートを気に入っている理由のひとつは、二階へ上がる階段が一部屋一部屋別個についていることだ。すぐ下の部屋の住人以外とは、ほとんど没

交渉ですむ。

「お帰りなさい。また、小包預かっていますよ」

佳代は、ゆったりした口調で言った。この人は、五十年輩だろうが、いつもきれいにして、上品さを漂わせている。

「いつもすみません。ちよつとこれを置いてから取りにかがいますから」

淳一は、階段を駆け上がり、ドアを開けて、玄関に

スーパーの袋を置くと、その中からマスカットをひとパック取り出して、階下へ降りた。

「あの、これ、今買ってきたんですが、どうぞ召し上がってください」

「まあ、そんなこととしてくださらなくてもよろしいのに」

「いえ、いつも留守の間に荷物を預かっていただけでますから……」

佳代は、申し訳なさそうにぶどうのパックを受け取り、奥へ引っ込むと、きちんと包装された大きな箱を抱えて出てきた。淳一宛の宅配便のラベルが貼られている。

「いつも熱心なのね。模型作りって、そんなに面白いものなの？　休みの日は、ほとんどお部屋に籠もりつきりでしょ」

「ええ、趣味といたら、これしかないものですから」

「若いんだから、彼女とデートでもなされればいいのに」  
「いやあ、そっちの方はどうも苦手なんですよ」

淳一は、佳代に礼を言い、その箱を抱えて自分の部屋に戻った。

趣味の模型材料を取り寄せているという淳一の言葉をすっかり信じ込んでいる佳代は、淳一のことを引っ込み思案の好青年と思っっているようだ。それはそれで、都合のよいことだった。

部屋に戻ると淳一は、買ってきた一週間分の食料品を冷蔵庫にしまった。

もう一度ドアの鍵を確かめ、チェーンロックをかけたから、先刻の小包を抱えて居間に入った。

そこで淳一は着ているものをすべて脱いでしまった。背広もワイシャツも下着までもである。

背広とネクタイを、クローゼットがわりにしている押入へしまい、その他のものは、洗濯かごに放り込ん

だ。

次に、バスタブにお湯を溜め始める。

全裸のまま居間に取って返した淳一は、わくわくしながら先刻の荷物をとく。

中に入っているのは、何枚かの女性用衣類と、高級ランジェリー、そして、通信販売会社の次シーズンのカタログである。

淳一は、そのひとつひとつを取り出しては、居間の

床に広げていった。

からし色のツーピース。カタログで見たのと比べ、ちよつと色が期待はずれだ。

85センチBカップのブラジャー。二万五千円もしただけあって、さすがに素材がよさそう。カップの上半分がレースづくかいになっている。淳一は、このレースの間から見えるのが、自分の本物の乳房だったら、どんなにいいだろうと思った。

伸縮性の強いナイロンシューズ三枚。白とピンクとパステルグリーン。

白いブラウスが一枚。前のボタンの両側に、細かいラッフルがいっぱいについて、ボリユームを持たせている。

そして、黒のベルベットのジャンパースカート。五センチ幅くらいのストラップがあり、バストのすぐ下あたりからのハイウエストで、腰のあたりまでがボデ

アイコンシヤス、そこで切り替えがあつて、スカート部分  
分はたつぷりしたフレアーになっている。ほぼ思った  
とおりの品物だ。

淳一は、すぐにでも着たいという衝動を押さえて、  
それらの品をハンガーに吊るした。

バスルームから、いっぱいになったお湯が外にこぼ  
れる音が聞こえてきた。

さあ、これから入浴だ。体中をすみからすみまで洗

って、全身を脱毛して……。

金曜日、23時。

風呂から上がった淳一は、全裸のまま奥の寝室へ入った。

この部屋は、淳一の宝物がいっぱい詰まった秘密の部屋だ。

淡いピンクのカバーの掛かったセミダブルのベツ

ド。レースのカーテン。花柄のランプシェードが可愛いサイドスタンド。下着やドレスの詰まったチェストと洋服箆笥。そして、サイドに姿見のついた大きな鏡台。

その鏡台の引き出しから、女性ホルモン入りのスキンクリームを出した淳一は、全身にたっぷり塗りこんだ。

きれいに脱毛されたその肌は、すべすべとして、ピ

ンク色に輝いている。

この高価なクリームを使いだしてから、特にきめが細かくなったような気がする。

クリームを塗り終わると、チエストからショーツと、薄いコットン製の白のナイティを出して身につける。

ゆったりしたつくりの冷ややかな綿布が火照った肌にかすかに触れて、心地よい。胸の部分に真っ赤なりボンが蝶結びされている。

次にフェイシャルパック。鏡台の椅子に腰掛けた淳一は、化粧水でパウダーを溶き、顔に塗る。

パックが乾く間に、手と足の爪の形を整える。それぞれの爪の両端を少しずつ切り詰め、ネイルファイルやすりをかけ、キューティクルクリームを塗り、オレンジステイクで甘皮を押し込む。

もう二ミリでも爪が伸ばせたらどんなにいいだろう。淳一はいつもそう思う。でも、ふだんの男として

の生活を考えると、今の長さが限界だった。

その作業が終わる頃になると、顔のパックが突っ張りだしてくる。

パックをはがし、パフコットンでローションをはたいたあと、いよいよマニキュアとペディキュアにかか  
る。

いろいろ迷った挙げ句、今週は不透明の赤のエナメルにした。あの黒のジャンパースカートによく似合う

だろう。

金曜の夜は、肌を休めるためにメイクはしないことにしている。でも、マニキュアとペディキュアだけは別だ。

明日の朝、鏡の前でメイクするまで、自分の顔を見ることはない。ところが手と足先は体を動かしている限り、どうしても目に触れることになる。

自分の体のうちで、自分自身で見えるところに女ら

しさをつくっておきたい。折りに触れ、きれいに彩られた手や足先を見ることで、自分は女なのだという気分が高まってゆく。淳一は、そのプロセスが好きだ。

爪からはみ出さないように両手両足を丁寧に塗る。

最初の頃は失敗して指先の肌を真っ赤にしてしまった。爪の表面をでこぼこにしてしまったりしたが、塗り方のコツをマスターしたこの頃では、爪の輪郭どおりに滑らかに仕上げられるようになった。

唇をとがらせて、指に息を吹きかけ、エナメルを乾かす。

男にしては細い指に、赤いエナメルがくつきりとしたアクセントをつけていた。

できに満足し、キッチンへ立った淳一は、冷蔵庫からワインを出してグラスに満たし、一杯だけ飲んだ。

金曜日は、夕食を採らない。

明日という日を、できるだけ細身の女らしい体形で

迎えたいからだ。

寝室に戻り、サイドスタンド以外のすべての灯を消す。

そして、ベッドの上に、コロンを振りかける。

その芳香の中で、今夜淳一は、甘い夢を見る。

土曜日、10時30分。

すり硝子とレースのカーテンを通した初秋の光が、

淳一の頬をバラ色に輝かせている。

さつきから、心地よいまどろみの中で、淳一は、開演ベルと、それにつづく万来の拍手を聞いていた。

今週もまた、土曜日と日曜日だけの二幕劇が始まる。

首尾よく可憐なヒロインを演じられるだろうか：

。。。

そつと目をあけて伸びをする。最初に目に入るのは、きれいにマニキュアされた十本の指。

（そう。あたしは、二一歳のOL。今日は、心はずむホリデー）

淳一は、静かに身を起こすと、ナイテイの裾を気にしながらベッドを出た。

まずはシャワーを浴びる。

バスルームの湯気の中で、次第に意識が目覚めてくる。

片手でシャワーのホースを持ちながら、もう一方の

手で、頬から首筋、そして肩のあたりをそつと撫でてみる。

ホルモン入りのクリームとパック、それにたつぷりの睡眠が、その肌をいつにも増してなめらかなものにしてくれていた。

体を拭いたあと、白い大きなバスタオルを体に巻きつけて、胸の上でとめ、頭にもタオルを巻いた姿で鏡台の前に座る。

いよいよメイクにかかる。

乳液で肌を整え、下地クリームを塗る。

ファンデーション、ノーズシャドー、アイシャドー。

アイライン。

ビューラーで睫毛まつげをカールさせ、マスカラ。

もう一度シャドーでアイメイクの仕上げ。

オレンジがかったピンクのリップと、そろいのチー

ク。

最後にパウダーを刷<sup>は</sup>き、肌合いを落ちつかせる。

メイクが終わると、下着をつける。

クリーム色のシェープパンツをはき、ペニスを股の間に挟み込む。

次に、シリコンパッドを入れたブラジャー。少し前かがみになった姿勢で後ろのホックをとめる。

真っ白なミニスリップをつけ、白いデザインストッキングを履く。

たつぷりしたドルマンスリーブの赤いサマーセーターと、白いデニム地の細身のミニスカートが今日のコーディネート。

ウィッグは、肩あたりまでのデザインボブにする。

土曜日はおしやれはしない。一週間分の家事をしなければならぬのだから、できるだけ活動的な格好がいいのだ。

姿見の前で出来を確認かめた後、淳一は、ピンクのサ

ロンエプロンをつけた。

まずは、バスルームの脇の洗濯かごに押しこめられたアンダーシャツやワイシャツを洗濯機に入れ、スイツチを入れる。次は、やはり食器がうず高く積まれた流し台に向かう。

「もう。淳一さんたら、こんなに汚しちやって……」  
淳一は、声に出して言ってみる。

「ほんとに、男の人って、だらしないんだから……」

土曜日、22時50分。

洋画劇場が終わり、解説者のいつもながらのおしゃべりが始まったところで、淳一はテレビのスイッチを切った。

いまどき流行らないくらいの純愛映画（もったも、ベッドシーンだけはしつかりあったが）。そのラストについて泣いてしまった自分に、少々呆れたりもするけ

れど、テレビの前にミニスカートの膝をそろえ、横座りしていることで、感じ方までふだんとは変わってしまっているようだ。

飲みさしのティーカップを持って立ち上がった淳一は、流しでそれを手早く洗い、そしてベッドルームに入った。

姿見の角度を調節して、そのフレームの中に自分がすっぽりと納まる位置の、ベッドに腰掛ける。

今日一日、この部屋の中でずいぶん動きまわった。

洗濯をし、キッチンのかたづけをし、掃除機をかけ、トイレやバスの拭き掃除をし、誰かに見られるのを気にしながら窓辺に布団と洗濯ものを干し、ほかにも窓拭き、アイロンかけ……、夕食には『オレンジページ』を見ながら手の込んだ料理も作った。

そんなふう立ち働くことで、女としての悦びを味わい、同時に、男のひとり暮らしにつきまとう面倒な

家事をかたづけしてしまおう。

ちよつと変わってはいるけれど、実益をかねた合理的な趣味だと、淳一は思っている。

そして今。

自分の目の前には、すこし背は高いけれど、細身で、けつこうコケティッシュな女性が座っているのだ。

なんでも自分の言いなりになる女。心も体も、すべてが淳一のものである女が、そこにはいるのだ。

彼女は、両手をミニスカートの上に置き、デザインストッキングで包まれた脚を少し傾けて腰掛け、伏し目がちにこちらを見ている。そのままざしは、これから始まるなにかを予感し、脅えているようにも見える。

淳一は、ミニスカートから伸びた脚をそっと撫でた。デザインストッキングの編み目の間から触れるその脚が、ちよつと粒立つ。その瞬間、淳一の背筋をぞくぞくとした感覚が走る。

手がスカートの中に忍び入る。

鏡の中では、女が赤いマニキュアの指で、ストッキングをくるくると丸めながら脱ぎ始める。

爪先からストッキングをはずしたその手が、またゆつくりと脚の肌をなめながら上に上がる。むだ毛がきれいに処理されたその肌は、ひんやりとなめらかだ。ぎゅつと膝を閉じている脚の意志を裏切るように、手がむりやり腿の間に割って入った。

「あ……」

淳一の口からかすかな声が漏れる。

シェープパンツの縫い目に沿って指が動く。

デニムのミニスカートはその手の動きに、まくれ上がってしまっている。

鏡の中の女は、身悶えながら脚を大きく開いてゆく。よく見ると、シェープパンツの股の部分にシミがひろがっている。

そして、下向きに折り曲げられた姿勢を無理強いされたその部分は、今にも布地を突き破って飛び出してくいそうなるほど張りつめている。

今日一日、あえて触れなかったそこに、初めて手が触れる。速まる心臓の鼓動に合わせて、その部分がひくひくと痙攣する。

いよいよ押し込められていた渾一自身を解放してやる時間がやってきた。

淳一は、シェープパンツに手をかけ、静かに降ろしていった。

そのとたん、ミニスカートの脚の間に、まるでうなりをあげるようにして、それが突き立った。

マニキュアの指が、その節くれ立ったペニスをそつと撫で、充血した亀頭の部分を軽く叩いたりする。

（かわいい子ね。こんなに興奮しちゃって。でも、そんなにかんたんにはいかせてあげないんだから）

淳一の中の女が、彼を焦らす。

（そうさ。これからたっぷりお前をかわいがってやるんだからな）

淳一の中の男が、彼女に応戦する。

今度は、左手がサマーセーターをまくり上げていく。  
白いスリップに包まれたバストがかたちよくもりあがっている。淳一は、それに触れ、もみしだく。

シリコンパッドの弾力ある柔らかさが、本物の乳房

のようにそれに応える。

「……ああ……」

鏡の中では、女が吐息とともにのけぞる。

赤いマニキュアの指が、まるでなにかにすがるように、ミニスカートから突き出た淳一自身を握りしめる。

「ああ……だめ……」

かすれた声が思わず漏れる。

ところが、もうひとりの淳一は意地悪くその手を止

めてしまう。

鏡の中の女は、ねだるような淫らなまなざしで、淳一を見返している。

立ち上がった淳一は、サマーセーターとスカートを脱ぎ捨て、スキンを取り出して、ペニスにかぶせる。

カーペットを汚してしまわないためと、できるだけ長持ちさせるために。

そのスキンの上から、それを握り、ゆっくりとしご

き始める。

淳一は、立っていることができずに、ベッドに倒れこんでしまう。

左手がスリップのストラップをずり下げ、体をまさぐる。

右手は、ときに激しく、ときに優しく、股間のものをしごく。波のように押し寄せる歓喜の瞬間を、そのたびにはぐらかすように、淳一は手を止める。

「ああ……、すてき……」

「もう、だめ……許して……」

そのふたつの言葉が、淳一自身の口から、なんども繰り返された。

鏡の中の女は、口を半開きにして、あえぎのたうつ。それでも執拗に自らを責めつづけた淳一が、ついに我慢の限界に達して、スキンの中いっぱい白濁液を放出したのは、それから約三十分後だった。

日曜日、14時。

アパートの中庭に、ぽつんと立つ銀杏の枝の先っぽで、いささか気の早い枯れ葉が中途半端に揺れている。レースのカーテンに身を隠しながら、淳一はボーツとそれを眺めていた。

（僕は何のためにこんなことをしているんだろう……）  
夏の終わりのせいだろうか。淳一は先刻から虚しい

気分にとらわれていた。

淳一が初めて女装したのは、高校時代のことだ。

男子の数が圧倒的に多い地方の進学校で、淳一は演劇クラブに所属していた。別に演劇が好きだったわけではないが、同じ中学だった友人に誘われて、なんとなく入部したのだ。

女子部員の少ないクラブで、舞台をつくるとなれば、どうしても、男子部員が女装して女役をすることにな

る。当時、淳一は小柄だった。そのために、一年の最初の公演から、女性の役が振り当てられた。

恥ずかしかった。

稽古の時など、学生服を着て、女言葉をしゃべっている自分が、なにかひどく惨めな気さえした。

ところが、いざ公演（それは、地区の高校演劇のコンクールだったのだが）の時になって、淳一は、これまでの十数年の人生で、一度も経験したことのない鮮

烈な気分を味わった。

メーカーキャップし、衣装をつけて舞台に立つ。緊張と興奮の中で、自然にその役に感情移入していった。すると、自分の中に、まったく新しい自分が生まれてくる気がした。受験勉強に追われている日常と大きくかけ離れた、精神の高揚した世界が、そこにはあった。

その日から淳一は、次第に、舞台の上で女になることに、やすらぎを求めるようになっていったのだ。

高校三年間で、老け役から少女まで、いろいろなタ  
イプの女を演じた。そして淳一は、それをけっこうう  
まくこなした。そのどれもが不思議と評判がよかった。  
メリハリがあり、自然な演技だと言われた。身長が伸  
び、高三の時には、現在の身長、一七三センチに達し  
ていたにも関わらず、ヒロインの役は、まるで当然の  
ように、淳一にまわってきた。

しかし、大学に入ってから、そんなことをすつか

り忘れて四年間を過ごした。

べつに演劇そのものに、さしたるこだわりがあったわけではなかったからだろう。

淳一がふたたび女装を始めたのは、今から四年前、就職して半年たった頃だった。

営業の途中、昼食のために入った喫茶店で、他に読むものがなくて、何気なく開いた女性週刊誌のあるページに目が釘付けになった。

それは、その秋流行のメイクのノウハウを特集したページだった。モデルののっぺりした素顔が、次第に陰影のある美しい顔に変わっていく様子が、十数枚の写真で、順を追って構成されていた。各写真の脇には、化粧法を説明したキャプションが添えられていた。

淳一の脳裏に、楽屋の鏡の前で、女物の衣装を着け、メイキャップしている自分の姿が、鮮やかに甦った。

そして、その日の帰り道、淳一は、矢も盾もたまら

ず化粧品を買ったのだ。

それから丸四年間、週末ごとの女装をつづけ、淳一は、先週、二十六歳の誕生日を迎えた。

「乙女座だものね……」

ほとんど意味のない独り言を呟きながら窓辺を離れた淳一は、また鏡の前に立った。

鏡の中には、『ノンノ』のグラビアページで、バイオリンケースを小脇に抱えてたたずんでもいそうな

少女っぽい女性がいた。

黒のベルベットのジヤンバースカート。白いブラウス。ラッフルで飾られた襟元には、真っ赤な陶製のブローチ。ショートボブの髪からのぞく襟足が、清楚な色気を漂わせていた。

手を腰の後ろで組み、ちよつと胸をそらしてポーズをとる。

ブラウスの下に着けたボディスーツが、さらに強く

ウエストを圧迫する。コンシヤスな服を着るときには、ボディースーツは欠かせない。

スリップやキャミソールのようなランジェリーが好みだけれど、ファンデーションも、けっして嫌いではない。

これはこれで、誰かに女であることを強制されているような奇妙な悦びがあった。

（そう。だれか……なのよね）

ふと、淳一は思った。

自分に女であることを強制してくる誰か。

女装した自分に視線を浴びせる誰か。

高校時代、舞台の上で感じた観客の視線のように、自分に注目している誰かの視線が欠けていることが、この虚しさの原因だ。

（けつきよく僕は、文字どおりのマスターベーションをするためだけに、週末を費やしているんだ）

淳一は、自分の女装姿を誰かに見られたいと思った。女装して、街を颯爽と歩きたかった。

しかし、一方で、一流のビジネスマンであり、リアリストでもある淳一は、ファンタジーとしての演劇の舞台と、現実の街がまったく違う世界であることも、よく知っているのだった。

日曜日、23時。

クレンジングクリームを拭き取った顔は、妙にてかてか光っているにも関わらず、先刻までの華やかさが失せた味気ないものだ。

そしてそれは、単に化粧を落としたせいだけではない。二日前の金曜日の夜の、期待に輝いていた表情とは大きく違っているのだから。

明日からまた、営業マンとしての一週間が始まる。ちよつとでも弱みを見せれば、競争社会から落ちこぼ

れることになる。淳一は、負けたくはなかった。出世欲も、達成意欲も、人一倍強い方なのだ。

（僕はけっしてホモではない）

淳一は、そう思っている。

（女装は単なる趣味なのだ。ただし、逃避のための：  
：）

高校時代、県下有数の受験高で、息詰まるような日常生活からいつとき逃げ出すために演劇クラブで女装

したように、今また、たったひとりの週末だけの女装を楽しんでいるのだ。

淳一は、パフコットンを取り出し、リムーバー除光液をしみこませた。爪にあて、真っ赤なマニキュアを擦り取る。

ひと拭きで溶かされたマニキュアがおちた後に、おちきれなかった分が、薄いピンクの膜になって爪に残る。そのあせたピンク色が、まるで祭の後の寂しさのように、淳一の心の中に広がる。

淳一は、この趣味も、結婚するまでだと思っている。気になる女性がいるにはいるが、そのあてはまるでないので、しばらくは続けていられるだろう。でも、もし結婚したら、すっぱりとやめるつもりだ。

大学時代、そんな気にもならなかったのだから、それも可能なはずだ。

マニキュアとペディキュアをおとしたあと、淳一は、化粧品と女性用の服をすべてしまった。なにしろ、遠

隔地通勤だ。明日はまた早く起きなければならぬ。

九月下旬。

この時まだ淳一は、自分の趣味が、人生を大きく変えてしまうなどとは、思っていないかった。

第二話 秋は嫉妬ぶかく

小泉真理は泣いていた。

声もあげずに、細い肩をかすかに震わせて。

その姿は、ふだんの陽気な彼女からは想像もつかない

いくらいに、消え入りそうなほどか細く見えた。

(これじゃあまるで、僕が泣かせているみたいだ)

真理の前に座った淳一は、ちよつとまわりを気にした。

昼休み。オフィスビル地階の喫茶店。さまざまな会社のサラリーマンやOLが満席状態で食事をしていく。しかし、真理の静かな泣き方に、誰も気づいていない様子ではなかった。

「お話があるんだけど、つきあってくれない？」

時計が十二時をさすと同時に、軽い調子で言われて、彼女の恋人である安岡の目を気にしながら、ここまでついてきた。しかし……。

「相談できる人、谷沢さんくらいしかないから……」  
テーブルに着いて、そう言ったきり、真理は声を詰まらせて泣き出してしまったのだ。

しばらくの沈黙がつづいた後、しかたなしに、淳一

の方が口を開いた。

「安岡と、なにかあったの？」

真理はかすかにうなずいた。

「：：私：：会社辞めようかと思ってるの」

「どうして？」

「もう、いられないもの」

「だから、どうしてなの？」

「彼が、別れてくれって言うの」

「え、安岡が？」

「彼、新しい人とお見合いして、つきあってるんだって。……専務の……お嬢さん……」

「え？」

淳一は思わず大きな声をあげてしまった。

現社長の弟であり、次期社長就任も時間の問題だと言われている若山専務が、娘婿をさがしているという噂は、かなり前からあった。総務部の誰それに白羽の

矢が立ったとか、営業一課の誰かが見合いしたらしいとか、もつともらしい話が始終社内には流れていた。

淳一はそんなことに興味もなかったもので、無視してきたが、その相手がライバルの安岡となれば問題は別である。

「……だけど、安岡と真理ちゃんは、課員みんなが認めてる、いわば公認の仲だろ」

「だから……会社、辞めるしかないのよ。いつまでも

いたんじゃない、彼のじゃまになるだけだもの」

「そんなふうを考えるなんて、真理ちゃんらしくないな」

「谷沢さんもそう思ってるのね。みんな、私のこと、誤解してるのよ。明るいだけの女だって」

「そんなこと、ないけど……」

「それに、私と彼の仲って、みんなが思ってるほどでもないんだ」

「どういうこと？」

「まだ：：：そういう関係もないし」

「へえ、そうなの：：：」

淳一は意外だった。

「こんなこと、谷沢さんに言うの、悪いのかな」

「べつに：：：いいけど：：：」

とは言ったものの、淳一は傷ついていた。ライバルの安岡が、出世のチャンスをつかみかけている、とい

うことがショックなのはもちろんだが、理由はそれだけではなかった。

淳一と安岡と真理は同期入社である。淳一と安岡が大和メデイカルに新卒で入社した年、小泉真理も短大卒の事務員として入社してきた。そして、三人が営業第二課へ配属になったというわけだ。

入社当時、淳一は真理に目をつけた。美人でしかも、物事にこだわらない彼女の明るさに惹かれたのだ。何

度か二人でデートしたこともある。

ところが、安岡も彼女に惹かれ、口説いていたらしい。

淳一と安岡はお互いに牽制しあいながら、真理の心をとらえようとアタックを繰り返した。

最初のうちは、どちらが優勢とも判断がつかなく、大胆で男らしい安岡と、クールでシャープな淳一と、真理の方もどちらとも決めかねていた。

しかし、夏頃になると、安岡の方に分があることは、はた目からもはっきりわかるようになってきた。真理の二人に対する態度が、明らかに違ってきたのだ。

淳一は、何事もなかったように身を引いた。悔しかったけれど、それ以上深追いするのにも、大人げないと思った。

しかしそのかわり、仕事では安岡に負けまいと誓った。安岡のことを必要以上にライバル視するのは、そ

んないきさつがあるからだ。

そして、淳一が「週末の女装」というおかしな趣味に走ったのも（淳一自身にもともとその性向があつたからにはちがいないが）、真理への失恋の痛手が大きなきっかけになつていたことは否めない。いわば自身自身の中に真理を求めた、と言い替えることもできる。その証拠に、女装した時の淳一の服の趣味は、どこか少女っぽさを残した真理の趣味に、そっくりだった。

「谷沢さん……私いつたい……どうしたらいいんだろ  
う？」

真理がまた涙声で言った。

その声音に、淳一は女の媚びを感じた。

（この人は、どうやら安岡との仲を修復したいと思っ  
ているのではないようだ。かつて自分に好意を持って  
いた僕に、安岡の代わりになってほしいと言っている  
んだ）

その時淳一は、自分がひどく侮辱されている気がした。いわばそれは、二重の侮辱だった。真理からと、そして、安岡からと。

淳一がこれまで真理に対して抱いていたイメージが、大きく崩れていく気がした。

「そんなこと、僕には、答えられないよ」

そんな言い方をするつもりはなかったのに、口の方が勝手に動いていた。

「そうよね……。谷沢さんには関係のないことだもの  
……」

真理はさみしそうに言った。

それから半月後の十月末、真理は「一身上の都合」  
ということ、会社を辞めた。

送別会も何も準備する間もない突然の退社に、営業  
第二課の社員たちは、安岡と真理の破局をそれとなく

感づいたようだ。安岡の前では、真理の話題はタブーだという気まずい空気が課内にただよった。

しかし、そんな雰囲気一度にひっくり返すような「事件」が起こった。

安岡が、国立のK病院から、世界にまだ二台しかないという西ドイツ製最新検査機器の納入契約を取り付けたのだ。関連システムも含めると総額八億円にもものぼる商品である。

課内は浮き足立った。半期ごとの決算にぎりぎり間に合う時期だったこともあって、会社中で、営業第二課がダントツの成績をあげ、利益に大きく貢献したということになったのだ。

しかし、そんな中で、淳一だけが沈んだ気分落ち込んでいた。

理由は二つあった。

まず第一に、これが淳一にとって、仕事上での初め

ての敗北だったことだ。入社以来、淳一と安岡は、いつも営業成績を争ってきた。二年目からはすでに、社内の中のトップクラスでの争いになっていた。そして、常にならずかの差で淳一が安岡に競り勝ってきたのだ。それが淳一のプライドだった。ところが、安岡のこの受注で、今上半期は大差をつけられての負けということになってしまったわけだ。

そしてもうひとつの理由は、この大型受注の背景に、

ある人物の影がちらついているということだった。K  
病院の内科医局長と若山専務は、親しいはずだ。この  
受注の陰には、若山専務の力添えがあつたにちがいな  
い。もしかすると、なんらかのリベートが、若山専務  
の持っている別会計の資金から、医局長のもとへ流れ  
たことも考えられる。そして、若山専務がそこまです  
るのは、娘婿となるはずの安岡に箔をつけようとした  
からに他ならなかつた。

もつと深読みすれば、自分を取り付けた契約を、安岡にゆずったのかも知れないのだ。

淳一は、安岡のことをけっして嫌ってはいない。それどころか、自分が仕事をしていく上でのよきライバルとして、必要な人間だと思ってきた。

ところが今、これまで対等だったその関係が、淳一の力の及ばないところで崩されようとしているのだ。

今後は、一対一の営業力だけの勝負は望めないだろ

う。安岡は、この四年間の淳一の努力をあざ笑うかの  
ように、さっさと出世の近道を歩み始めたのだ。

案の定、それからしばらくして、若山英子と安岡が  
婚約したという情報が、課長の口からもたらされた。

十一月下旬のある土曜日。淳一は、いつものように  
自分の部屋で女装していた。

いつもと違っていたのは、時計がもう午後の三時を

まわっているにも関わらず、部屋の中が少しも片づいていないことだった。

土曜日は女装して、女の子気分を味わいながら、一週間分の家事を片づけてしまおう日と決めている。ところが、今日は朝からずっと、居間の壁にもたれ、CDプレーヤーから流れる中島みゆきを繰り返して聞いているのだ。

今も、ちよつと首をかしげ、左肩から前に垂らした

ワンレングスのウィッグの髪を、なんとなく手でもて遊び、小さな声で歌を口ずさんでいた。

サーモンピンクの膝上丈のニットワンピースからのびた脚は、上等なストッキングに包まれ、つややかな光をたたえていたが、どこか虚ろげにカーペットの上に投げ出されていた。

つらい日常をいつとき忘れるために始めた女装なのに、その日常が重くのしかかってきて、いつものよう

に夢中になれなかった。

どうしても、安岡に取り残された悔しさが心の中にくすぶっていた。

それに、このところ、そのせいかどうか仕事がうまくいっていないかった。営業トークにも、いつものような冴えがなくなっていた。受注ができないだけではなかった。上得意からクレームが相次いだ。納品まぎわのキャンセルすら発生した。すべてが裏目裏目にこと

が運んでいくのだ。

ただ単に、偶然が重なってそうなっているだけかもしれない。しかし、そうだとしても、淳一は、早くこんな状態から抜け出したいと思った。

そのための突破口を早く見つけなければならぬ。そうしないと、たったひとつの趣味である女装も心ゆくまで楽しめそうになかった。

(すべてのことを、洗いざらい忘れてしまいたい)

突然、淳一は意を決したように立ち上がり、姿見に向かった。

女装外出。

以前からその誘惑にかられながら、自分にはとても無理だとあきらめていたこと。それを今、実行に移そう。

何か新しい強い刺激を味わうことで、このどうしよなものない気分から抜け出すことができるかもしれない。

い。

ワンピースのシルエットを確かめた後、淳一はふたび鏡台の前に座った。

部屋のドアを薄目にあけ、外をうかがう。二棟並んだアパートの中庭には、さいわい誰も出ていない。

外に出て、手早くドアの鍵をかける。すでに心臓が早鐘のように打ち始めている。

鉄階段をぎこちなく一段ずつ降りる。三段目でもうヒールを引っかけ、危うく転びそうになった。

ずっと外出など考えていなかったのも、淳一は靴やコートを持っていない。

唯一持っていたパンプスを履き、通信販売のパンプレットを見て可愛らしいのでつい買ってしまったウエスト丈のケープを、コート替わりにはおり、やはり、たったひとつだけのセカンドバッグを手にした。幸

い、パンプスはピンク、ケープは薄いグレー、バッグはオフホワイトだったので、色合いとしてはワンピースと合っていた。

全神経を足先に集中しながら階段を降り、あと三段ほどを残すところまでたどりついたとき、淳一の最も恐れていたことが起こった。

淳一の部屋のすぐ下に住む婦人、相原佳代の部屋のドアが開いたのだ。

佳代が生ゴミの袋を持って出てきたのと、淳一が階段を降りきったのはほとんど同時だった。ほんの一瞬だが、淳一は佳代と目を合わせてしまった。

反射的に身を翻し、小走りですパートの庭を横切り、敷地の境界にあるコンクリートの階段を駆け降りた。

その間、背中に佳代の視線を痛いほど感じた。

佳代の目から見えない位置にたどりつき、淳一はやっとゆっくり歩きだした。

（あの人、僕だということに気づいただろうか）

淳一は、もう外出したことを後悔し始めていた。しかし、すぐにアパートへ引き返すこともできそうになかった。もしそこに佳代がいたら、よけいに恥ずかしい思いをしなければならぬ。

淳一は、バス停へと向かった。

しかし、それから一時間後、私鉄ターミナル駅のあ

る街を歩きながら、淳一は出てきてよかったと思つていた。

高校時代、演劇部の舞台の上で女役を演<sup>や</sup>つた時より、ずっと興奮していた。

バスの中はすいていて、五人ばかりの乗客は誰も淳一のことを気にしているふうはなかった。

街をぶらぶら歩き始めてからも、時にすれちがいざま、ちらりとこちらに目を走らせる人はいたけれど、

不躑な視線は感じられなかった。それに、十一月下旬の早い夕暮れが、淳一に味方してくれていた。

しかし、自分の女装姿が、これだけたくさんの人の目にさらされているということだけで、淳一は、これまで経験したことのない精神の昂ぶりを覚えた。もう、仕事のことや安岡のこともすっかり忘れていた。

淳一はブティックのウィンドーを覗いたりしながら、ただ歩いた。もちろんまだ、入って洋服を買う勇

気はない。それでも、一時間ほどぶらぶらしたあと、薬局で買い物をした。

慣れないハイヒールで長時間歩いたせいで、かかると靴ずれをおこしてしまったのだ。

バンドエイドの小箱と、お金を出しながら「あの、これ：：」と上ずった声で言った時には、さすがに冷や汗が出たが、無愛想な店主は、ちらりと淳一の顔を見ただけで、レジを叩いた。

その後、淳一はファミリーレストランに入り、オーダーを済ませると、そそくさと女子トイレに立った。

個室の中で、スカートをまくりあげ、ストッキングを脱いで、靴ずれの上にバンドエイドを貼った。

トイレの鏡で化粧を直していると、女子高校生らしい二人組がしゃべりながら入ってきた。男であることを気づかれ、騒ぎ出されたらどうしようかと思ったが、二人は、今見てきたらしい映画の話に夢中で、どうや

らそんな心配はいらなかった。

席に戻ると、オーダーの品がすでに出ていた。

食事をしながらも、淳一は自分の仕草に気をつかった。ここは、夕暮れの街角とは違う。必要以上に明るい照明が、煌々と照っているのだ。

家族連れで賑わうまわりの席に気を配りながら、女らしい仕草で、しかも不自然にならないように気を使っ  
って食べ物を口に運んだ。そのせいで普段の半分も喉

を通らなかつた。

十一月だというのに、ブラに包まれたシリコンパツドの下の肌に汗が溜まっていくのがわかつた。

それでも淳一は、自分が一人の女として、世の中に認められたような気がして、うれしかつた。

食後の紅茶を飲みながら、スカートの裾が気になつて直している時、淳一はふと、真理のことを思い出した。

もし、男と女で感じ方や考え方の違いがあるとしたら、それは、皮膚感覚というようなものに違いない。いつも誰かに見られていることを前提として、女は世の中を生きているらしい。たとえ服を着ていても、裸身をさらしているのと同じなのだ。それだけ、女の方が肌の感覚が鋭く、傷つきやすくなるだろう。傷ついた時、誰かにすがりたくなるのもわかる。

現に今の自分だって、不安定で、心もとなくて……

もし、誰か自分のすべてを認めてくれて、無条件にすがれる人がいたなら、その胸に飛び込んでいくにちがいない。

(真理には、悪いことをしたな)

淳一は、心からそう感じた。

と同時に、自分が真理に冷たくしたのは、真理のそんな皮膚感覚に、嫉妬したからなのかもしれないと思つた。

アパートの最寄りのバス停でバスを降りた時、遠くで暴走族のかん高いホーンクラクションと、それを追っているらしいパトカーのサイレンが聞こえていた。

たぶん十時近くだろう。淳一には正確な時間がわからなかった。女性用を持っていないなかったので、腕時計をせずに出てきたのだ。

アパートまでの五分ほどの道のりを、淳一はハイヒ

ールの音を楽しむようにして、ゆっくりと歩いた。靴  
ずれは痛かったが、気分は浮き立っていた。

（明日の日曜日、もう一度女装して外出しよう。今度  
はもっと都心まで出てみよう。ブティックをまわって、  
素敵なコートや靴を買って……）

そんな事をあれこれ考えて、街灯の疎らな新興住宅  
街の歩道を歩いていた。

と、その時だった。

前方の道路を、三台のバイクが野蛮なうなり声をあげて近づいてきた。パトカーにけちらされて、わき道へそれた暴走族だろう。

(関わらない方がいい)

淳一は、そちらを見ないようにして、足を速めた。

三台の先頭を走ってきたバイクは、淳一の横をいったん通り過ぎた後、二十メートルほど後方で、急ブレーキをかけた。あとの二台もそれにつづいた。

何かを話しているらしい声が聞こえた後、バイクの方向を変える気配がした。

(いけない。僕は、狙われている)

そう感じた淳一はさらに歩を速めた。

案の定、バイクは二三度エンジンをふかした後、ゆっくりと動きだした。

淳一は振り向きもせず走りだした。

しかし、バイクの音は、それを楽しむかのようにゆ

つくりしたスピードで、じりじりと近づいてきた。

履き慣れないハイヒール、それに、大きな歩幅を許さないスカート。アパートまではあとほんの三十メートルほどだったが、淳一に逃げきれるはずもなかった。バイクは、すでに淳一にぴったりとついて走っていた。

ひとりが、かん高い口笛を吹いた。

と、一台のバイクがうなりをあげて追い越し、淳一

のすぐ前の歩道に乗り上げた。

身をかわして逃げようとする淳一の腕を、バイクの上から男がつかんだ。

それを振り払おうともがいている間に、他の二人がバイクを停めて近づいて来た。

「やけに背の高いねえちゃんだぜ」

男二人に両わきから抱え込まれる形になり、口をふさがれた。いくらもがいても、逃れる術はなかった。

もうひとりの男も、バイクから降りた。淳一は、三人の男の腕に横抱きに抱えられる形になって、歩道脇の空き地に引きずられた。

バッグはとつくに手から落ちていた。ハイヒールも片方が脱げてしまった。

淳一の体は空き地の草むらに仰向けに投げ出された。三方から、男たちの手が押さえつけてきた。

太股をつかみながら、正面からのしかかっている男

が、ヘルメットを脱ぎ捨てた。その目が獣のように光っていた。男は、手の位置をずらして、淳一のスカートをまくり上げた。

その手がショーツにかかった時、淳一は、反射的に全身の力を込めて手足をばたつかせていた。

「おとなしくしてな」

男は、馬乗りになって淳一の両頬を張った。

と、その弾みでロングヘアのウィッグが頭からずれ

た。

「なんだ、こいつ！」

男が驚いてちよつと腰を浮かした瞬間、力を入れて引き上げた淳一の膝頭が、男の急所を突き上げた。

「うっ！」

さらに、折り曲げた脚を思いきり伸ばすと、片方だけ残っていたハイヒールで、男の股間を下から蹴り上げる形になった。

「……ぐ！」

男は、もんどり打って倒れた。

あとの二人がそれを見てひるんだすきに、淳一は二人の手を振り払い、ウイッグを押さえながら逃げだした。

「くそ、待て」

二人の男は、立ち上がると、淳一を追ってきた。

淳一は、ハイヒールを脱ぎ捨て、裸足で走った。も

うなりふりかまっている余裕はなかった。

アパートまで全力疾走して、敷地の入り口のコンクリートの階段を駆け上がった。

そこで、重大なことに気づいた。

（鍵がない！）

部屋の鍵の入ったバッグを持っていないのだ。

男たちの足音は、もうすぐそこまで来ている。

とっさの判断で、淳一は灯のついていた相原佳代の

部屋のドアを叩いた。

「たすけて！」

ドアはすぐに開いた。

中庭を走ってくる男たちと、淳一の姿を見て、佳代は即座に状況を理解したらしく、淳一を部屋に入れ、ドアを閉めると、すばやく鍵をかけた。

「バツキヤロウ」

男のひとりが激しくドアを蹴上げた。

しかし、すぐにあきらめたらしく、足音は遠ざかっていった。

淳一のまわりを、打って変わった静寂が取り巻いた。ドアを背にして立っていた淳一は、へなへたと玄関のたたきに座り込んでしまった。

しばらくそのままの姿で肩で息をしていると、佳代が濡れタオルを持ってきた。

「大変だったのね」

「あ、どうも」

淳一は、そう言ってから、自分の格好にあらためて気づいた。

突然、激しい羞恥がこみ上げてきた。

女装し、しかも強姦されかかったということがすぐに見て取れるなりなのだ。ケープは引っ張られて片肩からずり落ち、ワンピースの衿もとも大きく破れてスリップがのぞいている。その上、枯れ草や泥が全身に

ついていた。

淳一は身も世もないという心境だった。

「……あ、あの、部屋の鍵を入れたバッグを外でなくしてしまつて……すぐに、取りにいけますから……」  
もじもじとそう言って、立ち上がりかけると、佳代が止めた。

「およしなさい。まだあの人たち、そのへんでうろろしてゐるわよ」

「でも……」

「明日の朝、明るくなつてからの方がいいわ。今夜はここにいればいいんだし」

「え……？」

佳代の言葉も意外だったが、それ以上に淳一は、佳代の落ちつきぶりに驚いた。

女装した隣人が夜中に泥だらけで飛び込んできたというのに、まるでごくふつうの出来事のように対応し

ているのだ。

「まあ、足も手も泥だらけね。ちようどよかったわ。

お風呂を沸かしたところだったのよ」

シャワーを浴び、顔や手の泥を落として、淳一がバスルームから出ると、アコーデイオンカーテンで仕切られた脱衣場のかごの中に、新品のナイロンシューズと白いシルクのネグリジェがたたまれて置いてあつ

た。

それを手に取って困っていると、気配に気づいたらしく、佳代がキッチンから声をかけてきた。

「それ、私が若い頃使ってたものなの。パジャマかトレーニングウェアでもあればいいんでしようけど、私、そういうもの使わないから」

「でも、これは……」

「裸でいるよりいいでしょ。それに、泥だらけのワン

ピースをもう一度着るわけにもいかないでしょうし」

佳代は、まるで当たり前のことを話しているという調子で言った。

（この人、いったい、なに考えてるんだらう？）

とりあえず、自分のことは棚に上げて、淳一は首をかしげた。

しかし、佳代の言うとおりに、他に着るものもないので、そのネグリジェに袖をとおした。

（もうどっちみち、恥ずかしい姿を見られているんだし）

それは驚くほど上等な品だった。ネグリジェと言うより、レストガウンと言った方がいいような、高級な仕立てになっている。絹の肌触りが素肌に心地よかった。よく見ると、左胸の部分に、やはり白い糸で、手の込んだバラの花の刺繍が施されていた。丈がちよつと足りない気がしたが、ゆったりしたつくりで、渾一

の体にもよく合っていた。

淳一はカーテンを開け、おずおずとダイニングキッチンへ出た。部屋の造りは、淳一のところとまったく同じだ。

身の置きどころがないというふうに小さくなって立っている、「そこにかけて」と、佳代が言った。

淳一がダイニングテーブルに着くと、佳代は紅茶をいれてくれた。

「……驚いたでしょうね。あんな格好で……」

淳一が、テーブルの上の紅茶を見つめながら、まるで独り言を呟くように言うと、その向かいで自分のカップに紅茶を注いでいた佳代が、ちよつと照れたように言った。

「そのことで、谷沢さんに謝らなければいけないことがあるのよ」

「……?」

「谷沢さんのところに届く小包、私、一度だけ、中味を開けて見ちゃったことがあるの。だから……知ってたんですよ」

「え……」

それは、淳一が通信販売で取り寄せている女性用の服や下着のことだった。ウィークデーの日中に宅配便で届く荷物は、いつも佳代が預かってくれていたのだ。

「谷沢さんがおっしやってたような模型造りの材料に

しては、持った感じがちがうなって思つて、つい。昔から、好奇心が人一倍強くて、気になりだすと確かめずにはいられない性格なの。悪いことだとはわかつていたんですけどね。ごめんなさい」

佳代は、まるでいたずらを見とがめられた子供のように謝つた。

「……いえ……もう……いいですけど……。それにしても、たった一度荷物の中味を見ただけで、僕にこん

な趣味があることがわかったんですか？」

「ええ。最初は彼女への贈りものかなと思ったんですけどね。それにしては数が多いし、サイズも大きいものばかりでしたでしょ。それに、谷沢さん、土日は部屋にこもりつきりでしょ。たぶん、自分で着るためのものなんだろうなって」

「いい年をした男が、ほんとにお恥ずかしい……」

淳一は、佳代がすべてを見すかしていたことを知っ

て、顔から火が出るような気分だった。

「そんなことないと思いますよ。べつに悪いことなさ  
つてるわけじゃないし……」

紅茶を一口飲むと、佳代はつぶけた。

「私ね、今はもう五十四のおばあちゃんですけど、五  
年ほど前まで、銀座のクラブで雇われマダムなんてこ  
とをしてたのよ。こんなことを言うとなんですけど、  
谷沢さんよりずっといろんな人間を見てきているわ。」

世の中にはいろんな人がいて、いろんなことを考えていて、だから楽しいんじゃないかって」

いともあっけらかんと、そんなことを言っただけで佳代を、淳一はちよつと驚いて見つめた。

「谷沢さん」

「はい」

「私、ちよつと思っただけですけどね。かわいらしい格好がお好きなようだけれど、あなたの顔立ちだったら、

もつと大人っぽいファッションの方がよくお似合いになると思うわよ」

「え？」

突然、佳代は話の方向を変えた。

「ちよつとこつちへいらつしやいな」

立ち上がると、佳代は淳一を居間に招じ入れた。

居間に入ると、このアパートには似つかわしくないような高級家具が揃っていた。中でも、箆笥の多さに

は驚かされた。洋服箆笥や和箆笥が、部屋中を取り巻いて所狭しと並んでいる。

佳代は、淳一を鏡台の前に座らせると、突然、その顔に下地クリームを塗りはじめた。

淳一に何か言う暇を与えないほど手早く、佳代は淳一の顔を作っていた。

「ほらね、あなたのほりの深い顔を生かすには、こんなふうにシャドーを入れるといいのよ」

シャドーブラシを動かしながら、佳代は言った。

「女らしさのポイントは口紅よ。こんなふうだね」

佳代は、紅筆を器用に使って、淳一の唇を描いた。

「やっぱりそうね。あなたは、もつときれいになれる人だと思ったわ」

淳一も、鏡を見て驚いていた。この四年間、ほとんど毎週メイクをして、ずいぶん上達したつもりでいた。しかし、佳代が施してくれたそれは、これまでのメイ

クがいかにかに素人っぽいものだったかを思い知らせた。

鏡の中の淳一は、これが自分の顔だとは信じられな  
いほど美しかった。そして、「女」だった。男の弱点  
を見事に隠しきっていた。

「私、これからあなたにいろいろ教えてさしあげまし  
ょうか」

「え？」

「私ね、クラブのママをやってたころ、若い子をたく

さん育ててきたの。あなたなら、育てがいがあるわ」  
佳代は、淳一の顔を見ながら満足そうに言った。

第三話 初春は振袖模様

「谷沢君、ここんところ、君らしくないトレンドだなあ。悩み事でもあるんじゃないのかね。相談にのるよ」

課長は、会議室の灰皿に煙草を押しつけながら言っ

た。

テーブルには、コンピュータフォームに打ち出された淳一の個人別売上指標が広げられている。

「まあ、安岡君が、専務のお嬢さんと婚約したことで、腐る気持ちもわからないでもないが、こればかりはどうしようもないことだからな……」

淳一がなににも言わないうちに、課長は自ら答えを出していた。

「僕だって実のところ、あまりうれしい気はしないさ。たぶん、僕の在職中に、やつは、僕より上役になっていくんだらうしね」

ボーナズシーズンになって、大和メデイカルでは、査定のフィードバックも兼ねた個人面談が、課ごとに行われている。淳一は今、あまり思わしくない部課長会での査定結果を聞いたばかりだ。

「だがな、そんな幸運をつかむやつは世の中のひと握

りだ。あとの人間は、自分の努力で、人生を切り開いて行くしかないんだからな」

課長は、まるで自分に言い聞かせるように言った。

「特に僕達みたいに営業畑の人間は、数字がすべてなんだ。数字をあげて、安岡君を見返してやるくらいの気持ちでがんばれよ」

「はい」

そんなことは言われなくてもわかっていた。安岡は

安岡、僕は僕。この一ヶ月、淳一は、そう考えようと努めてきたのだ。

しかし、そう思おうとしても、どうしても納得できないものがあつた。入社以来ライバルとして、目標として見てきた安岡が、仕事とはまったく関係のないことで出世してゆくのだ。それではいけないと思つても、日々の仕事から張りが失せていく気がした。

「ところで、君が進めてるT大病院のプロジェクトな。

その後報告がないが、どうなってるんだ」

「え？ ええ。業者の選択について、教授会そのものはどうにでもなると思うんですが、キーマンは、実務面での実権を握ってる産婦人科の山田教授なんです。

これが、どうしようもないほどの堅物で。じつは、今日、二度目のアポイントが取れまして、これから行って来るところです」

「そうか。決まれば大きなネタになることは必至だか

らな。がんばってくれよ」

「はい」

面談を終え、淳一が会議室の外の廊下を歩いていると、かわりに内線電話で呼ばれたらしい安岡とすれちがった。

「おう。どうだった、ボーナス？」

「まあ、おして知るべし、ってところかな」

少し歩いたあと、淳一は会議室に入っていく安岡を

振り返った。

今頃、きっと課長は、もみ手でもしながら、将来の上司を迎え入れていることだろう。

「うちが、来年度、病院全体のシステム整備をするつていうのは、教授会の中でも、いわばマル秘事項ですよ。それがどうですか。その話が出るか出ないかのうちから、いろんな業者が押し掛けて来るんですから。

「いったい誰がもらしているんですかね」

「いや、私どもも、先日先生のところへ来てはじめて知ったわけでした」

「よく言いますね。この前来た時、アメリカのA社のホスピタルシステムがどうの、ドイツのB社のはどうのって、いきなり始めた人が」

「いや、それは、まあ、たまたま医療雑誌に載ってたものですから」

「とにかく、今はお話しする時期じゃありませんから」  
「しかし、総予算だけでも教えていただけませんか？」  
「そんなこと、プロジェクトの中心になってる僕の口から言えますか」

「いえ、予算だけでもわかれば、それに見合ったご提案をこちらでも用意いたしますから……」

「僕の方でも、まだいろいろと研究してる段階ですからね」

そろそろ髪に白いものが混じり始めたT大学付属病院産婦人科医局次長の山田は、それだけ言うとはソファを立って、自らのデスクに向かった。スチームで曇った研究室のガラス窓の向こうに、外科病棟がかすかに見えている。

淳一は、デスクに歩み寄った。

「先生、どうですか。今度一席設けさせますから、おつき合いいただけませんか」

顔を上げた山田の目が、メタルフレームのレンズ越しに、きらりと光った。

「そういう話、僕の前ではやめてくれませんか。君たちは、病院ならどこでもリベート商売が通用すると思っっている。ここは、いや、少なくとも僕は、そういうことは大嫌いです」

淳一は、読みを誤ったと思った。山田に突然こんな話を持ち出すなんて、自分がつい弱気になってしまっ

ている証拠だ。

「帰ってくれませんか」

以前の淳一なら、ここで食い下がるところだ。何の進展もなしに、一回の訪問を終えるなど、営業マンの恥だと思っていた。

ところが、今日の淳一は違っていた。

山田のデスクの上に掛かっている時計が目に入ったのだ。

午後五時十五分。

郊外のここからならアパートまで、一時間以内で帰れる。

「じゃ、またおじやまします」

淳一は、病院ロビーの公衆電話から、直帰する旨の電話を会社に入れた。

アパートが近づくにつれて、どうしても足早になっ

ている自分に気づき、思わず苦笑してしまった。

入口のコンクリート階段を駆け上がると、淳一は、迷わず一階の相原佳代の部屋へ入っていった。

「ただいま」

「まあ、早かったのね」

キッチンで夕飯の支度にかかっていた佳代が言った。

「うん。お菓子買ってきたよ。ここ置いとくね」

テーブルの上に和菓子の箱を置いた淳一は、上着を脱ぐと、さもそれが当然というふうには、着替えを持って風呂場に入っていた。

それから約三十分後、昼間の汚れを洗い流した淳一は、脱衣場で体を拭いていた。

ドライヤーで短い髪を乾かすと、脱衣籠から、下着を取って身につける。

薄紫のシェープパンツ。

シリコンパッドを入れたフロントホックブラ。

そして白いスリッパ。

そのままの姿でキッチンに出てきた淳一を見て、佳代が言った。

「なんですか、その格好は。いい若い娘が」

「だって、すぐに着るの暑いんだもの」

昼の声とはまるで違った甘えた声で言いながら、淳一は、奥の部屋の鏡台の前に座る。

基礎化粧をしたあと、手早くメイクする。

この一ヶ月で、淳一のメイクの腕は驚くほど上達していた。ちよつと角張った感じのあごを、ほっそりともみせるすべも知った。

メイクを終えると、肌色のパンテイストッキングを穿き、洋服箆笥から、黒のタートルネックセーターを出して着た。スカートはタータンチェックが斜めに入ったフレアー。ちよつと太めの革ベルトをし、セーター

ーにカメオのブローチをつける。

ウイッグは、長めのソバージュを選んでみた。

キッチンに戻ると、料理のいい匂いが漂ってきた。

「ママ、どう？」

淳一からママと呼ばれた佳代が振り向いた。長い間銀座のクラブのマダムだった佳代は、その呼び名がいちばん自然な感じするというので、淳一は、そう呼ぶことに決めたのだ。

「そうね、目尻のピンクのシャドー、もう少し薄くのばした方がいいわ。ちよつと下品な感じがするから」  
「そうかしら？」

淳一は、もう一度鏡に向かい、言われたとおりに直した。

「ジュンちゃん、ちよつと盛りつけ、手伝って」

「はい……」

初めて女装外出をした夜、暴走族に強姦されかかっ

て、佳代の部屋に飛び込んで以来、淳一と佳代の奇妙な共同生活が始まった。

相原佳代は今年で五十四歳。

明治時代から横浜で商売を営む旧家に生まれた。昭和二十年代の終わり頃、手広く事業をやっていた父親が急逝した。残されたのは、佳代と母親、そして、父の死を聞いて押し掛けてきた債権者たちの群だった。

当時としては珍しい女子大に通っていた佳代は、旧

華族の出身で世の中のことをなにも知らない母親と二人で生きていかなければならなくなった。その上、借金を抱えているのだ。

しかたなしに、大学を辞めた佳代は、銀座の高級クラブで働くことになる。

もともと美人だったこともあって、銀座で一二を争うホステスとして、財界や政界の大物たちにもひいきができていった。中にはパトロンになりたいという男

や、ぜひ二号にという男も現れた。が、佳代はそれを潔しとせず、拒否しつづけた。

借金完済と時を同じくして母親が亡くなり、天涯孤独となった昭和四十年代からは、クラブのママという肩書きで、経営者から店の切り盛りいっさいを任された。もちろん、それも一従業員としての立場を貫き通してのことだった。

世話好きの気つぶのいいママということ、ホステ

私たちは佳代を慕った。そして佳代は、彼女たちを、政財界の実力者たちを接待する、キャリアを持った女性たちという視点で、教育した。

五十歳を一年後に控えた五年前、佳代は仕事を自分の最も信頼する後進に譲って引退した。郊外のこのアパートで、手持ちの株を運用して、余生を静かに送ろうと思ったというわけだ。

ところが、いざ隠居生活を始めてみると、手持ちぶ

さたで、その上さみしくてしかたがない。

特異な過去を持つ佳代には、近所に話し相手もできなかった。一度も結婚していないので子供や孫もいなかった。

三年四年とたつうちに、なにか自分がぼけていくような気さえしていた。

そこへ飛び込んできたのが、女装趣味を持った淳一だったというわけだ。

生来の世話好きと、ものごとに対して偏見のない考  
え方（もちろんそれは、見方を変えれば、常識を持つ  
ていないということにもなるのだが）をする佳代は、  
自分にできるやり方で淳一に協力してみたいと考  
えた。多くのホステスたちを育てたように、淳一とい  
う素材を、一人前の女性として育ててみるのも面白い  
と思ったのだ。

淳一の方は、仕事での挫折感もあって、女装という

趣味にのめり込んでいった。以前は、週末に秘かに楽しんでいただけだったのに、佳代という理解者を得て、ほとんど毎日、佳代の部屋で女装するようになった。佳代が自分を女の子として扱ってくれるのがうれしかった。近ごろでは、休みの日など佳代とともに近くのマーケットへ買い物に出るまでになっているのだ。

こうして、郊外のアパートの一室で、血の繋がらない、それどころか、性別さえ取り違えた奇妙な母娘が

誕生したのだった。

「今夜は、お茶のお稽古の日ね」

流しで夕食のかたづけをしながら、佳代が言った。

「ええ、そうよ」

食器を運びながら淳一が答える。

「ほんとは、着物でした方がいいんだけど……」

「きもの？ 一度着てみたかったの。ママの貸してよ」

「私のはジュンちゃんには地味なもの。若い頃のはみ

んな人にあげちやっかし」

そこで佳代は、何かを思いついたように食器を洗う手を止めた。

「きもの、買ったげようか？」

「わあ、うれしい。でも、あたしが買うわ。ボーナス出るもの」

「いいのよ。私からのプレゼント。私に生きる張りをくれたジュンちゃんへの感謝のしるし。そうね、初詣

に間に合うように、お振袖を買おうか？」

「わあ、振袖っ」

淳一は、ソバージュの髪をかき上げながらうれしそうに言った。

どこかのファッションビルから、スイングふうにあレンジされたクリスマスソングが流れていた。街は、クリスマスの開放感と、年末のあわたたしさがなく交

ぜになって活気に満ちていた。

イブの土曜日、淳一は佳代といっしよに、女装して初めて都心まで出た。

ダークレッドのスタンドカラーのブラウスに、真っ白な前ボタンのベスト。タイトスカートとテーラードジャケットは、そろいのベージュだ。ショートボブのウィッグにしたのは、着物を合わせるとき、じやまにならないようにと考えてのこと。

「お嬢様は、すらりとして、はつきりしたお顔立ちでらっしやるから、やはり大きな柄がお似合いだと思ひますよ」

メインストリートから一本奥に入った通りにある大きな軒構えの呉服屋で、大島にたすき掛けをした男の店員が棚をさがしながら言った。

「ほんとは仕立ててもらう方がいいんでしようけどねえ。なにせお正月まで日がないから」

店員の出した和紙の包みをひとつずつ開きながら、佳代が言った。

「いえいえ、うちはお仕立て上がりのもので、品揃えは豊富ですから」

淳一は、佳代の隣で振袖を見ながら、正体を見破られるのではないかと声も出せない。

「ジュンちゃん、これなんかいいんじゃない？　ちよつと羽織ってごらん」

佳代に言われて、淳一は、ジャケットを脱いで、畳敷きの帳場に上がった。

店員が、淳一の後ろから振袖を着せ掛ける。前にまわって、襟を合わせるとき、店員の手が、淳一の首筋から胸のあたりにかすかに触れた。淳一は、なにかぞくぞくしたものを感じた。

例の“強姦未遂事件”を除けば、異性（？）に体を触れられたのは初めてだった。

それから、さまざまな染めや織りの振袖を着てみて、けつきよく最初に着た白い地にたくさんの蝶々をあしらったものに決めた。

裾から片袖にかけて鮮やかな藤色が入り、そこに金糸や朱や紫で絵羽模様には織り込まれた大きな蝶がはねを広げている。そのまわりを小さな蝶々たちが乱舞している。そんな、優雅でちよつとモダンな図柄のものだった。

そのあと帯を選び、半襟や、帯締め、帯揚げ、足袋などを買い、小間物屋に寄ってバッグや草履を揃えた頃には夕方ちかくなっていた。

「デパートに寄って食料品買って行くけど、ジュンちゃん、どうする？」

「ハイヒール穿いてこんなに長い間歩いたの、初めてだったから、あたし、疲れちゃったわ。ちよつと休ん

でもいい？」

淳一は、ビルの二階のテイールームで待つことにした。

眼下には、ケーキの箱をぶら下げた家族連れが何組も、夕暮れの歩道を急いでいた。

窓際のテーブルで、ホットココアのカップを両方の掌で包むように持って、薄暗闇に溶けてゆく街を眺めていると、なんだかセンチメンタルな気分になった。

（この大都会の人の海の中に、ひとりの女として漂っている僕。このタイトスカートの中に、誰も知らない秘密を隠して……）

淳一は、腰のあたりがジーンと熱くなってくるのを感じた。

なぜか突然、郷里の家族のことを思い出した。

「今年は帰らないから」と、実家に電話をしたのは昨日のこと。家族たちは淳一が帰らない理由が、こんな

暮らしをしているからだとは、思ってもいないだろう。  
（母さんや父さん、それに妹が今の僕を見たらなんと  
言うだろう？）

そんなことを考えていたとき、淳一に向かって誰か  
が声をかけてきた。

「お姉さん、きれいだね」

振り向くと、ひとりの少女が立っていた。

少女？

いや、声のトーンからすれば、少年のはずだった。

その少年（？）は、だぶつとした上等な毛皮のロングコートをはおっていたが、コートの下はTシャツとジーンズというおかしな格好をしていた。

刈り上げた髪は短く、Tシャツの胸も平板で、明らかに少年にはちがいないのだが、きめの細かい肌はぬけるように白く、細い肩と首の上に小さな顔があり、その唇がいやに紅かった。その上一五〇センチ台だと

思われる背の高さが、彼を少女に見せているのだ。

「ここ、いいかな」

淳一が、困ったな、という顔でもじもじしていると、彼は、その返事を待たずに、コートのままで向かいの椅子に腰掛けた。

「ひとり？」

少年が聞いた。

淳一はしかたなく、ちよつと微笑んで小さく首を振

った。

（この子は、僕を誘うつもりなんだらうか？）

「そうか、待ち合わせなんだ」

テーブルに肘をついて、乗り出すようにこちらを見つめてくる少年の大きな黒い瞳に、淳一は吸い込まれていくような気がした。長いまつげが瞬きと同時に、白い肌に翳をつくった。

「誰に教えてもらったの？ そんなに上手なお化粧し

てる人、女の子でもなかなかいないよ」

（えっ……：どういう意味？）

淳一は少年の顔を見つめた。

「お姉さん、男でしょ」

少年の言葉に、淳一は一瞬、息が止まりそうになつた。

狼狽して視線を泳がす淳一の顔を面白そうに見つめて、その、まるで萩尾望都はぎおもとの漫画にでも出てきそうな

少年は、いたずらっぽく笑った。

少年はコートのポケットをまさぐり、そこから名刺大の紙切れを出して淳一の前に置くと言った。

「僕、芹沢昇。みんなはシェリーって呼んでる。夜はいつもこの店にいるんだ。もしよかったら、一度遊びに来てよ」

ウェーターがテーブルに近づいてオーダーを聞いた。

「なんになさいますか？」

「いらない」

シェリーと名乗った少年はそう言うと、さっさと席を立ち、店を出て行ってしまった。

淳一は、しばし呆然と、少年の出た行っただ入口を見つめていた。そして、やっと我に返り、テーブルの上の紙を手を取った。

その厚手のトレーシングペーパーには、こう書かれ

ていた。

十二月二十九日から一月四日までの休暇を、淳一はうきうきして迎えた。

このごろでは、洋服を取りに行く以外、ほとんど自分の部屋へは帰らず、佳代といっしょに過ごしている。それでもふだん女装していられるのは夜だけ。長くて

も土日の二日間だけだ。

それが一週間もずっと女になっていられるのが、淳一にはうれしかったのだ。

朝起きてシャワーを浴び、メイクし、その日の服を選ぶ。日中は、佳代といっしょに家事をしたり買い物に行ったりする。その間に、佳代はさまざまな女のたしなみを教えてくれる。お茶、生け花はもとより、下着の選び方から、肌を痛めないむだ毛の処理の仕方ま

で……。夜は夜で、ネグリジエに身を包み、佳代と布団を並べて寝る。そんな毎日が過ぎていった。

年が明けた元日、佳代に着付けをしてもらって、淳一は振袖姿で初詣に出かけた。

天气がよかったこともあって、神宮の杜は人であふれていた。佳代と並んで玉砂利の参道を歩いていると、白足袋に錦の草履を履いた淳一の足は、どうしても内股になってしまう。

この前、例の奇妙な少年に正体を見破られて、神経質になってはいる。でも、そのせいばかりではなかった。

朝、着付けてもらうために、淳一が肌襦袢を着かかったとき、佳代はこんなことを言ったのだ。

「最近の子はこれだから困るわね。着物の時は、下着なんてつけないものなのよ」

胸のない淳一のこと、ブラジャーだけは許してもら

えたが、佳代はショーツを穿くことを禁じた。

そのせいで今、淳一のペニスは肌襦袢にじかに触れている。大股で歩こうものなら、襦袢とこすれ合ったペニスが着物の前を立ててしまう。どうしても小さな歩幅で内股に歩くことになるのだ。

大鳥居をくぐると、人出はさらに増え、まるで通勤電車のラッシュユのようなありさまになった。そして、ついに人の流れは止まってしまった。

ここで淳一は、せつかくの苦労が水の泡になりそう  
な、とんでもない目にあつた。

押し合いながらじりじりと流れていく人波の中で、  
最初は誰かの手が自然に触れているのだとばかり思っ  
ていた。

帯の結びの下あたりから始まって、その手は淳一の  
お尻のあたりを何度も往復した。そして、そのうち、  
お尻を揉むように撫で始めた。

さすがに淳一もそれが痴漢だと気づき、ちらりと見ると、どうやらその手は、佳代と反対側、淳一の右隣にいます、頭の禿げ上がった背の低い中年男のものらしかったです。

淳一がまず思ったのは、せつかくの晴着が汚されるのではないかということだった。しかし、その手が後ろから前にまわってきたときには、それどころではなくなりました。

中年男の手は、振袖の裾を割って入り、淳一の太股あたりを襦袢の上から撫でまわした。

佳代に訴えるわけにもいかず、もじもじしていると、男の手は股間のあたりをまさぐりだした。

気持ちを平生に保とうとする必死の努力も虚しく、淳一のものは、襦袢の中でむくむくと首をもたげ始めていた。

男の手がまた移動したのでほっとしたのもつかの

間、その手は、淳一の前をはだけるようにして、襦袢の中に侵入してきた。そして腿にじかに触れてくる。

べとつとした感触が、内腿を這いあがってきた。

もう絶体絶命だった。淳一のペニスは完全に勃起していた。

男の手が陰のうに触れた瞬間、淳一はぴくんとけいれんした。

と、男の手も動きを止めた。男も驚いているにちが

いなかった。

それでもその手は、確かめるように少し上へ動き、ペニスを触ったあと、あわてて出て行った。

男が、怖いものでも見るようにこちらをのぞき見ているのがわかった。

淳一は、顔から火が出るほど恥ずかしかった。男の視線から逃れるようにうつむき、まわりの人に気づかれないように前を直した。

やっと人の流れが動き出した。

「ちよつとここで止まってくださーい。押さないで」  
本宮の前で、ハンドマイクを持ったガードマンたちが参拝客たちになつていた。人波を区切っては、一定の人数ずつ誘導しているのだ。

さつきまでの混雑は、どうやらそのせいらしかった。  
淳一たちの順番がきて、その人混みから解放される  
と、淳一は佳代の腕をとって拝殿前に急いだ。先刻の

男から早く離れたかったのだ。

「どうしたの？」

「ううん、ちよつと……」

淳一は、恥ずかしそうに言った。

お賽銭を投げ、柏手を打った。

佳代がずいぶん長い間拝んでいるので、淳一が聞いた。

「なにをお祈りしてたの？」

「ジュンちゃんがもつときれいになって、いいお嫁さんになれますようにって」

「もお、ママったら」

言ってみれば二人のゲームである。佳代にしても自分には経験のない“ふつうの母親”になったつもりで、遊んでいるのだ。

そのあと境内に出ていた記念写真屋に、淳一の振袖姿を撮ってもらった。

「お見合写真にするんだから、きれいに撮ってくださいね」

佳代は少々過剰なくらい、年頃の娘を持った母親を演っていた。

もうひとつ、その境内でちよつとした出来事があった。

社務所の前でおみくじをひく順番待ちをしている

時、淳一は自分の隣に立っていた娘に目を奪われた。

背の高さは、一七三センチある淳一とほぼ同じくらい。オレンジ色の晴着を着ていた。

近代的な顔立ちと、高い身長が、そのモダンなデザインの鳴海なるみ絞りの振袖に驚くほどマッチしていた。

（きれいな人だなあ。こんなふうになれたらいいのに……）

そう思いながら、並んでおみくじをひいた時だった。

その娘が信玄袋から財布を出したはずみに、いっしょにハンカチが飛び出し、地面に落ちた。

「あ、落ちましたよ」

言って、ハンカチを拾いながら、

(しまった！)

と思った。

佳代以外の人の前で、淳一はなるべく口を開かないようにしている。どうしても必要なときには、不自然

にならない程度に高い声でか細くものを言う。

ところがその娘に見とれていたせいで、つい男の声で言ってしまったのだ。

一瞬の間、娘は、不思議そうにこちらを見ていた。

淳一は、どきまぎした。

ハンカチを差し出した手が妙に中途半端に宙に浮いている気がした。

しかし、娘は人の顔をじろじろ見ているのも失礼だ

と思ったのか、すぐに「ありがとう」と明るいい声で言  
つて、ハンカチを受け取り、社務職の方に向き直った。

淳一が本当に驚いたのは、そのあとだった。

おみくじを受け取り、小走りに駆けていく娘の先に、  
紺の着物と羽織を着た男が立っていた。

「芳樹さん、あなたの分もひいてきたわ」

それは、なんと安岡だったのだ。

淳一は、慌てた。

そばで待っていた佳代のことにも気にせず、すかさずその場を離れ、参道脇の木の陰に隠れた。

考えてみれば、これだけの人混みの中、しかも振袖姿の淳一のことを、安岡が気づくことはまずない。しかし、淳一にしてみれば、女装という自分のファンタジーの時間の中に、突然現実のライバルが出現したのだ。動転してもしかたないだろう。

それに、娘がこちらを気にしているふうに振り向い

たのも気になった。

ちよつと落ちついてから、おみくじを枝に結びつけるふりをして、振袖の間から、二人の方をうかがった。

（そうか、あれが若山英子か……）

仲よさそうに並んで歩いていく二人の後ろ姿を見ながら、淳一は思った。

（若山専務の娘は、噂どおりの美人なんだ）

英子がふたたびこちらを振り返った。しきりに、自分のことを目で捜しているような気がして、淳一はおみくじを結び終わると、また木の陰に隠れた。

おかげで読まれることもなく榊の枝に結びつけられてしまったおみくじには、淳一の今年の運勢が、こんなふうにかかれていた。

「大吉。待ち人來たりて、良縁有り。商売、思わぬ進展を見せ、隆盛」

## 第四話 切り札はダイヤのクイーン

「T大病院のシステム改革プロジェクトを、一言で言  
つてしまえば、日本におけるホスピタル・オートメー  
ションのモデル病院をつくろうということです。とり

あえず来年度計上される予算は、約七十五億円。次年度からも……」

重役連を前にして、課長が淳一のまとめたレポートを得意げに読み上げる。

「……当社として注目したいのは、このシステムが、従来のカルテのICカード化などだけではなく、端末での入力をできるかぎり簡略化しようとしている点です。たとえば各検査室の場合ですと、そこで得た検査

データや会計データを手入力するのではなく、検査機から直接オンラインでホストコンピュータに結びつけようと考えているのです。インターフェイスの問題など、全体の設計ということ言えば、一商社である当社にとって、非常に不利なのですが、検査機器そのものの、機種もノウハウも持っているという点で、強力なコンピュータ企業の協力さえ仰げば、当社が窓口となつて全体の受注ができると考えています……」

大和メデイカル株式会社の会議室では、T大学病院のシステム導入に関する緊急営業会議が開かれていた。

淳一の追ってきたこのネタが予想外に大規模なものであることがわかり、全社を挙げて取り組むことが決定されたからだ。

出席者は、病気療養中の社長を除く全重役、各部の部長、そして、T大と直接交渉に当たってきた淳一と、

上司の第二営業課長、それに、どういうわけか、安岡が呼ばれていた。

「それで、T大の方は、業者をいつまでに決めようと考えているのかね？」

課長の報告が終わると、さっそく社長代行をしている若山専務が聞いた。

「はい、来月中には決定したいという意向のようです」  
「入札というかたちになるのかね？」

課長の目配せで、淳一が答える。

「いえ、業者選択に関しては、教授会から、このプロジェクトの推進委員会に一任されています。実質的には、プロジェクトリーダーである山田教授のさじ加減ひとつだと言えます」

「そうか。皆さんどうだろう。この線で、うちでもプロジェクトチームをつくって推進していくということ。とりあえず、受注を決めるために、全社一丸とな

って動くわけだが、T大側との交渉という点では、今後も谷沢君に力を尽くしてもらいたいと思っている」

若山専務の言葉に、淳一は無言でうなずいた。もともとそのつもりである。

「しかし、これだけ大きな話になってくると谷沢君ひとりじゃなにかと荷が重いだろう。そこで、谷沢君とは同期で、しかもずっと同じ課で働いてきて気心の知れた安岡君にも、一枚加わってもらいたいんだがね」

（そうか、そういうことだったのか）

淳一は、この会議の意味にやっと気がついた。

確かに大仕事である。しかし、一病院からの受注に、直接には関係のない総務経理部門の部長まで集めて、こんな大仰な会議をやる必要はないはずだ。

若山専務がこの会議を招集したのは、けっきよくこれと言いたかったのだ。

自分の娘婿になる安岡に手柄を立てさせる。そのこ

とを事前にみんなに認めさせることがこの会議の主旨である。

淳一が半年近くかけてつめてきたこの話も、もし受注できれば、けっきよくはその成果の半分以上が安岡に持っていかれるという仕掛けだ。

淳一は、あとの会議の進行をただ呆然と聞いていた。

「とにかく、よろしく頼むよ」

課に帰り、来週からの行動計画をふたりで練ったあと、帰りのエレベーターの中で安岡が言った。

「ああ、しかし、まだどっちに転ぶかわからん話だな」

淳一は、少々投げやりに言った。

その真意がわかっているのか、いないのか、安岡は苦笑した。

「あら、芳樹さん」

ドアが開き、一階のロビーに降りたところで、エレベーター待ちをしていた若い女性が安岡を呼びとめた。

「あ、英子さん。専務のお供ですか？」

「ええ、そうなの。珍しくご馳走してくれるんですけど」

若山専務の娘、英子である。ワインレッドのワンピースと真っ白なアンゴラのコートが、長身に、似合っ

ている。

「よかったら、芳樹さんも来てくださらない？」

「ええ。でもお邪魔じゃないんですか」

「ううん、パパの相手じゃ退屈なもの」

そう言いながら、英子は、そばに立っていた淳一に  
笑いかけ、会釈した。

すかさず、安岡が気づき、それぞれを紹介した。

淳一が英子と言葉を交わすのはこれが初めてではな

い。一ヶ月前、初詣に行った時、神宮の社務所で会っている。

もつともその時淳一は、アップに結ったロングヘアのウィッグをかぶり、化粧して、振袖を着ていたのだから、英子にわかるはずもなかった。

「じゃあ、せつかくだから、お供させていただけませんか」

安岡が言い、最上階の専務室に行く二人を、淳一が

見送る形になった。

エレベーターに乗り込もうとして、英子がセカンドバッグを持ち変えた時、いっしょに持っていた手袋の片方がロビーの床に落ちた。

「あ、落ちましたよ」

淳一は何気なくそう言って、拾った。

エレベーターの中の英子に差し出すと、英子は受け取りながら、なぜか驚いたように淳一の顔を見ていた。

エレベーターのドアが閉まり、きびすを返してロビーを出ようとした時、淳一はふと足を止めた。

(落ちましたよ。確か、あの時も……)

次の日は、土曜だった。

相原佳代の部屋で淳一が目覚めた時、時計はもう十時を少しまわっていた。

ピンクのシースルーのネグリジェの裾の乱れを気に

しながら、布団を出ると、佳代が化粧しているのが見えた。

「おはよ」

「あ、ジュンちゃん、起きたの？」

ふだんよりちよつと濃いめの化粧をし終え、スリッパ姿で立ち上がった佳代は、ハンガーから服を取りながら言った。

佳代は、淳一の前で平気で下着姿になる。淳一が女

装している時は、女同士という感覚なのだ。

五十代半ばだというにの、佳代の肌やスタイルは少しも衰えていない。体の線にフィットした紺地のスーツを着た佳代は、三十代にさえ見えた。

「ママ、きれいよ」

佳代の肩越しに姿見を見て、淳一は言った。

「ありがとう」

「出かけるの？」

「ええ。昔の仲間がね、久しぶりに会おうって言うから」

「あたしもいつしよに行くわ」

「私の友だちに会いにかい？」

「やーね、そうじゃないわよ。そろそろ春物のお洋服を買つとかなきやいけないでしよ」

「だったら、早く用意なさい」

ところが、シャワーを浴び、メイクし、服を選び、

淳一が外出の準備を整えるまで、一時間近くはかかった。

「これだから、女の子って嫌いよ。早くしないと遅れちゃうじゃないの」

「ごめんなさい」

淳一は可愛らしく肩をすくめる。

「それにしても、少し派手なんじゃない？」

佳代は、母親の顔で、ちよつと不服そうに言った。

淳一の今日の装いは真っ赤なコル・シユミネのセーターに、膝上15センチの黒いレザーの巻きスカート。そして、やはり黒のレザーコートをはおっている。長いフラツパーの髪が、肩の上に大きく広がり、三角形のイヤリングに、ルージュやマニキュア、それにストッキングもすべて赤である。

「あたし、このごろ、むしやくしやすること多いから、ぱーっとした格好がしてみたかったのよ」

赤いパンプスを履きながら、淳一は言った。

街へ出て、二人で軽い昼食をすませたあと、昔のホステス仲間が待っているという、ホテルの前で佳代と別れた。

ひとりになった淳一は、午後いっぱいをいくつかのファッションビルをまわることに費やした。ブテイックを何十軒ものぞき、春物のワンピースやブラウス、

それに下着類を買った。

ランジェリーショップのフィッティングルームで、ストラップレスブラの試着をしている時だった。カーテンを閉めてあったのに、なにを勘違いしたのか女子大生らしい太った客が、いきなり入ってきた。

「あ、ごめんなさい」

女子大生は、淳一を見ると、慌ててカーテンを閉めた。

すかさず胸を両腕で押さえたので、どうやら感づかれずにすんだようだったが、鏡の中にはフラツパーヘアの若い娘が、裸の上半身から落ちかかったブラを押さえ、おびえた仕草で立っていた。

DCブランドのロゴが入った紙袋をいっぱい持つて、淳一はビルの一階のフルーツパーラーに入った。

ガラス張りのウインドーの向こうに、暮れなずむ街

を見て、フルーツパフエをつついているとき、淳一は、あまりにも自然に女を演じている自分に、嬉しさと同じ時に多少のさみしさを感じた。

半年前、初めて女装して外出した時のような胸の高鳴りを、このごろでは感じない。きれいにメイクし、きれいな服を着て、軽く脚を組んで腰掛けている様は、なるほど堂に入っているだろう。その姿を他人に見られるのは嬉しい。けれど、それだけではもうさしたる

刺激も感じなくなっている。

最近では、一七〇センチ以上の女性も珍しくはない。淳一が女になればなりきるほど、ひとは淳一のことを「ただの女」としか見てくれないのだ。

それだけ淳一の女装が完璧な証拠だし、ぜいたくな悩みなのかもしれないが、淳一はなにか物足りなさを感じた。

そしてそれはたぶん、先刻のランジェリーショップ

で、自分の裸身を見られた時に感じた「ときめき」が尾を引いているせいらしかった。

（せつかくの女装。もっとワクワクするようなアバンチュールがしてみたい）

淳一はそう思った。

淳一はふと以前会った少年のことを思いだした。去年の暮れ、やはりこうしてティールームから夕暮れの街を眺めていた時、突然話しかけてきた少女のような

少年。淳一の女装を、即座に見破った唯一の人物だ。

淳一は、あの少年にもう一度会ってみたくなくなった。

（あの時もらった女装スナツクのカードが、バッグに入っていたはずだわ）

タクシーを降りると、そこは、やたら細くて背の高い雑居ビルだった。

レザーコート の 裾 を なびか せ な が ら 狭 い エ レ ベ ー タ

ーホールに入った淳一は、上りのボタンを押した。

紙袋は駅のコインロッカーに預けてきたので持ち物は赤いバッグひとつだ。

三階の、コンクリートむき出しの通路のいちばん奥に、その店はあった。

手に持ったカードと、ドアのプレートが同じである

ことを確かめたあと、淳一はおずおずとノブに手をかけた。

店内は、予想していたのとは違って、意外に清潔で明るい。

カウンター席が五席、テーブルが三つ、そしてちよつとしたダンスフロア、というのが見渡せる限りの全容だった。

「いらっしやいませ」

カウンターの途中で、口髭に蝶ネクタイ、銀ラメベストのバーテンが言った。

「何にしましょう？」

「あの、：：ギムレットを」

「はい」

淳一が男の声で言ったにも関わらず、バーテンはまったく表情を変えずに答え、後ろの棚からボトルをさがした。

カクテルに口をつけながら、淳一はどうしたものかと考えていた。

時間が早いせいか、客は淳一一人だ。

しばらくそうしているうちに、淳一はグラスをあけてしまった。

「おかわり、つくりましたよ」

バーテンは淳一のグラスを取って、ふたたびカクテルをつくり始める。

「あの……」

「……？」

「ここに、芹沢とか、シエリーとかいう子が……」

そこまで言うと、バーテンは淳一を手で制し、初めてにっこり笑って、壁のインターホンのボタンを押した。

「シエリー、お客様よ」

バーテンが低い声の女言葉で言うと、インターホン

から声が返ってきた。

「うん、いま出てくところ」

ちよつとして、奥のドアが開くと、そこからまるでアイドルタレントのような鮮やかな緑のミニドレスを着た少女が出てきた。

バレエのチュチュのようにひろがったミニスカート。体の線に沿ってぴったりとつまったウエストとバスト。細い腕がふわりとふくらんだ袖の中にほの白く

見える。

ショートカットの頭には、大きな羽根飾りのついた帽子をかぶり、やはり緑色のイヤリングをつけている。

少女は、そこに立ったまま、少しの間淳一の顔を見ていたが、すぐにえくぼをつくってにっこり笑った。

「あ、いつかのお姉さんだ」

声を聞いて初めて、その少女があ那时的少年だと、淳一は確信が持てた。

「僕、カルマミルクつくって」

バーテンに言うと、シェリーと呼ばれた女装少年は、  
淳一の隣に座った。

長いまつげが、きちんと上向きにカールされ、白い  
肌の上に薄くメイクしたその顔は、まるで人形のように  
だ。

「かわいいわ」

淳一は、シェリーに対してというより、その姿に感

嘆してつぶやいていた。

「今日はね、ピーターパンって感じでまとめてみたんだ。いいでしょ」

シェリーは、淳一にっこりと笑いかけながらそう言った。

「ここで、働いてるの？」

淳一が聞くと、シェリーはバーテンと顔を見合わせ、意味ありげに笑った。

「僕、これでも昼間は専門学校の学生なんだ」

シエリーは女言葉を使わない。しかしそれは、若い女の子がよくそうするように、自分のことを「ぼく」と呼び、わざと乱暴な口調でものを言っている、という感じだ。

「コンピュータのプログラマーになるんだって。笑っちゃおうでしょ」

バーテンが横から茶化すと、シエリーはぷーっとふ

くれてみせた。

「じゃあ、ここはアルバイト？」

「そういうのとも、ちよつとちがうな。マスターはお金くれないし……」

シェリーはまた、バーテンに向かって言った。どうやら、この男がこの店の経営者のようだ。

「なに言ってるの。あたしなんかよりずっとかせいでるくせに」

「そんなことないよ。一晩に三人も四人も相手してるわけじゃないもん」

「ね、わかったでしょ。この子、ここへ来て客引いてるってわけ。かわいい顔して、とんだ食わせ者」

マスターが、淳一に向かってウインクしながら言う  
と、シェリーは不服そうに反論した。

「あーっ、そういう言い方ってないと思う。僕は、マスターの手助けになると思っただけでここへ来てるんだけど

な。だって、この店に来るおタチの客の八割は僕目当てなんだもの」

「まあ、しよってるわね」

マスターはそう言ったが、その表情からして、シェリーの言ったことは、まんざら嘘でもなさそうだった。

「お姉さんくらい女らしくて、きれいなら、きつと声かける男いるよ」

突然シェリーは話題を変えて、淳一に話しかけてき

た。

「え、そんな……。あたしなんて、あなたにくらべたら、男丸出しだもの」

「じゃ、賭けようか。今日これから入ってきた最初の男は、かならずお姉さんのこと口説くよ」

「まさか。そんなことないわよ」

その時ちょうど、ドアを開けてやせた背広姿の男が入ってきた。

「おはよ。あら？　こちら、新人さん？」

「うん、そう」

「ふうん。お化粧、上手ね」

それだけ言うと、背広姿の男は、奥のドアの向こうに消えた。

その後ろ姿を見送りながら、少し残念そうに淳一が言った。

「ほら、やっぱり、声なんかかけない」

「ちがうよ。あの子はネコだもん。男のうちに入ってないの」

それからしばらく、淳一とシェリーは、埒らちもないことをしやべりあった。

酔いが回ったこともあって、いつしか、お互いを「ジュン」「シェリー」と女の子同士のように呼び合っていた。

と、奥のドアから一人のイブニングドレスの女が出

てきた。

「ゆうべ、麻雀で徹夜しちやったから、化粧のノリの悪いこと」

やせこけた頬を見て、それが先刻の男であることは淳一にもすぐわかった。

（あたしのが、きれい）

さすがに口には出さなかつたが、淳一はそう思った。

その後、二三人、シエリー言うところのネコの客が入ってきて、奥のドアに消え、それぞれ女装をして出てきた。

セーラー服あり、和服の人妻風ありで、みんな好き勝手な格好をしている。

時計が八時を少しまわった頃だろうか。二人連れの男が店に入ってきた。

「あら、つのちゃん。お久しぶりね。どこで浮気して

たのよ」

女装者たちは、黄色い声を上げながら、男たちとともにテーブル席に移る。

淳一は、新顔ということもあって、酒やつまみを運ぶ役にまわった。まるで新入りのホステスにでもなったようで、まんざら悪い気はしなかった。

突然スピーカーからロックのビートが流れだし、シエリーがレベツカのナンバーをカラオケで歌い始め

た。声のトーンこそ男だが、ボディアクションは、女性ロッカーになりきっている。

シェリーの歌を感心して聞きながらソファに座ると、隣にいた男が、淳一の肩に腕をまわしてきた。

淳一はびくりとして、男の顔を見た。

「おや：：ウブなんだ。初めて？」

淳一は目を伏せるようにしてうなづく。

すると男は、淳一の耳に口をつけてつぶやいた。

「二人で、どっか、出ない？」

男の息が淳一の耳をくすぐる。背骨にぞくぞくとした感覚が走った。

淳一は困ったように、ちやうど歌い終わったところだったシェリーを見やった。

「……おや、角沢さんたら、浮気者なんだ。横でマユミがにらんでるよ」

シェリーは、エコーのかかった声で、いたずらっぽ

くそう言った。

それをきっかけに、淳一の反対側に座っていたマユミが角沢の膝をつねる。

「ごめんごめん、ジョークだよ」

淳一から離れ、マユミの肩を抱いた角沢の胸に、厚化粧のマユミが甘えてしなだれかかった。

シェリーはカウンターに淳一を引っ張って行くと、にこりと笑って言った。

「ほらね、僕の勝ち」

淳一の胸は、まだときどきしていた。

もし、あのまま角沢の誘いにのったとしたら、どんなことになるんだろう。そんなことを考えながら、テーブル席を見やっているとシェリーがつづけた。

「ジュンは、どんな男が好み？　なんなら、僕が紹介してあげるよ」

「えっ？」

「まだ処女なんでしょ。男と寝てみたいって、思ったことない？」

「……そんなこと……、あたし……」

「こわい？」

「そういうことじゃあ……」

「ほんとに女の気持ち味わいたいんなら、やっぱり男に抱かれてみなきゃ」

シェリーはからかうようなまなざしで、淳一を見た。

「ジュンなら、みんなが寝たがるところけどな」

淳一は、真っ赤になってうつむいた。

それからしばらく、淳一はテーブル席には加わらず、カウンターでシェリーと過ごした。

何人かの男の客が入ってきて、何人かが女装者の肩を抱いて出ていった。時計が十時をまわった頃、グレイの背広にメタルフレームの眼鏡の、四十代後半と思われる男が入ってきた。何気なくそちらを向いた淳一

は唾然とした。

「どうしたの？」

シエリーが淳一の視線を追いながら聞いた。

「ああ、山田先生」

T大病院の山田教授だ。

「あの人ね、産婦人科のお医者さんなんだ。女の人のあそこばっかり見てて、女では興奮しなくなっちゃったんだって。うそみたい」

シェリーは、淳一の耳に口を寄せて、おかしそうにそう言った。

「変な趣味なんだよ」

「? : : 変な、趣味？」

「マゾ。女装者にいじめられるのが好きって」

その時、淳一の目が、ふだん女装している時には見せない鋭い光を放ったことに、シェリーも気づかなかつた。

「女王様、どうぞ、私めになんなりとお命じくください」  
一時間後、淳一はラブホテルのベッドに腰掛けてい  
た。

その前の床にひざまず跪いた山田は、懇願のまなざしで淳  
一を見上げている。

ここ数カ月、何度となく話しているにもかかわらず、  
山田は、淳一の正体にまったく気づいていないようだ。

もつとも大病院の医局次長である山田が、単なる一セールスマンのことを気にとめていなくとも、なんの不思議もない。まして、その女装した姿を想像してみることなどあるはずもない。

(それにしても……)

淳一は、ここに入ってからの山田の豹変ぶりにいささかたじろいでいた。

女装の淳一を落ち着き払った態度で、悠然とエスコ

トトしてきた山田が、この部屋に入ったとたん、突然卑屈な目つきで命令してくれと言いだしたのだ。

「命令って……、いったいなんて言ったらいいんでしよう？」

「たとえば……、キスしろとか……」

山田は眼鏡ごしに見上げていった。

少しためらったあと、淳一が恐る恐る応える。

「……キス……してください」

「だめ。もつと乱暴に言つて」

「じゃあ……キス、なさい」

「はい、どこにキスいたしましょう？」

山田は、お預けをくらっている犬のように、両手を膝に添え、ちよつと首を傾げながら言う。その姿に、淳一は、いつか読んだS M小説を思い出した。

「そうね……あたしの靴にキスをおし」

「はい、喜んで」

淳一が突き出した真っ赤なパンプスを、宝物のように両手で受けた山田は、嬉しそうに身をかがめて口づけた。

T大病院では堅物で通っている山田に、こんな一面があることに、淳一は本当に驚いていた。と同時に、ふだんさんざん手こずらされている山田を、この機会にいじめてやりたいという気持ちがむくむくとわき上がってくるのを感じた。

パンプスにキスしていた山田の唇がだんだんと上にあがり、ストッキングで包まれた足の甲に触れかけた時、淳一は、足先を伸ばした。

「……うッ」

さほど強くではなかったが、靴先で喉を突かれた山田は、のけぞった。

すでにその顔には、怯えと悦びが奇妙に入り交じった表情が浮かんでいる。

「あたしは靴にキスしろと言ったのよ」

「しかし、女王様のおみ脚があまりにもお美しいので  
……」

「ほお、そうなの……」

淳一は、パンプスの先で山田の髭のそりあとを撫でながら言った。

「生意気なことを言うじゃない。で、お前のぞみはなんなの？ はつきりお言い」

「はい、女王様のスカートの中にある秘密を、私めに  
拝ませてください。できれば、そのコックから湧き出  
す聖なる水をかけていただきたいのです」

「おだまり！」

淳一は、ヒールの先で、山田のみぞおちあたりを突  
いた。

「うぐっ」

山田はうなり声をあげてしりもちをついた。

「お前のような汚れた者が、あたしの体をただで見た  
いというのかい？」

「はい、女王様。お願いでございます」

山田は、這いつくばるようにして、淳一の靴に頬摺りしてきた。

「それじゃあ、あたしの体を見せる前に、お前のお  
見せ」

「……え？」

「まず、お前が裸になるのよ」

淳一は、だんだんこのゲームが面白くなってきた。

「裸に、ですか？」

「そう、お前が先に全部脱ぐのよ」

「はい、仰せのとおりに」

山田は、立ち上がると背広から下着にいたるまで、着ていたものを脱ぎ捨て、全裸になった。

「生意気に、立ってるじゃないの」

淳一の真つ赤なパンプスは、今度は、勃起してリズムを刻んで揺れている山田のペニスをいたぶった。

山田は、その靴先の動きに、トロロンとした目つきになっっている。

「それで……、そんなにあたしのものが見たいのかい？」

淳一は、今度はあえてやさしげな物言いと言った。

「はい、女王様、ぜひともに」

「それじゃあ、好きにおし」

山田は、悦びの表情を顔いっぱいには浮かべ、また淳一の前に跪くと、おずおずとレザーの巻きスカートに手をかけた。

そのとたん……

「おやめ！」

一転、強い口調で言うと、淳一は、山田の頬を逆手で張った。

山田は、怯えて淳一を見上げる。

「だれがあたしの体に手を触れていいと言ったの。お前はあたしのペットなのよ。ペットならペットらしくなさい」

「……でも……」

「口ごたえは許しません。そのズボンを持ってこつちへおいで」

突然、なにを言われたかわからず、不可解な表情で

今脱いだばかりのズボンを引きずりながら山田が近づくと、淳一は、そのズボンからベルトを抜き取った。

「後ろをお向き」

淳一は、山田の腕を後ろにまわさせ、ベルトを両手首に巻いて、バックルにとおし、絞った。その上で余ったベルトの先を後ろから首に掛け、ぎゅっと引いた。山田が、うっ、と喉をつまらせ、上に引き上げられた手首がきりきりと音を立てたところで、ベルトを首輪

の形にして縛りつける。

背中を軽く突くと、山田はみっともなく前につんのめって倒れた。

後ろ手に締め上げられたまま、絨毯に顔を打ちつけた山田は、苦しそうにもがきながら起きあがった。

「おすわり」

山田は向き直り、また、従順に淳一の前に跪く。

「お前の汚れた手で、あたしに触れることは許しませ

ん。どうしてもサービスがしたいというなら、口だけでなさい」

淳一は、そう言いながら、両足のパンプスを山田に向かつて脱ぎ捨てた。

山田はすぐにその意味を理解したらしく、獣じみた声を立てながら、淳一のスカートの中に顔をつっこんできた。

左右に首を振りながら突き進んでくる山田のせい

で、巻きスカートがまくれ上がる。そのレザーの臭いに、山田は、いよいよ興奮しているようだった。

山田の口が、淳一のウエストあたりまでねじ込む。

そこで山田は、前歯で器用にパンティストッキングの上の端を噛み、ずり下げ始める。中央の一カ所を下げただけでは、腰に引っかかってうまくいかない。山田は腰の両脇に首をまわし、三カ所を少しずつ、順に下ろしていかなければならない。

腕も首も自由がきかない山田にとって、その作業は  
けっして楽なものでない。次第に鼻息が荒くなってい  
くことからそれがわかった。しかし山田は、嬉々と  
してその作業をつづけていた。

淳一が少し腰を浮かせると、ストツキングは腿のあ  
たりまで下がった。山田は、淳一の左右の脚を交互に  
下ろしていき、ついに、その両足からストツキングを  
抜き取ることに成功した。

すかさず、またスカートの中に頭をつっこむと、今度はシヨーツを脱がしてゆく。腰骨のあたりに、山田の荒い息がかかる。そのせいで、淳一 of 感覚も尋常ではいられなくなってきた。

シヨーツが腰からはずされる頃には、淳一の内腿は山田の唾液でべとべとに濡れた。黒いレザーのスカートの中央部には、ペニスがピンク色に張りつめてそそり立つ。

ショーツを足先からはずした山田は、両足を大きく開いた淳一の内腿に顔を埋めるようにして、そのペニスに頬ずりした。その表情は、まるで母の乳房に甘えるようでもある。

(早くくわえてほしい)

そう思う自分の気持ちを抑えて、淳一は意地悪い口調で言った。

「お待ち！」

山田はびくりとして、上目づかいに淳一の顔をうかがった。

「もし、あたしを満足させられなかったら、どうなるかわかっているわね」

「はい、女王様、心からご奉仕させていただきます」  
山田は嬉しそうにその肉棒をくわえた。

山田のフェラチオのテクニクは相当なものだった。淳一は、何度も声をあげそうになったが、ぐつと

耐えた。

それでも五分後には、堪えきれなくなつて、自分のシリコンパッドの乳房をセーターの上からかき抱いて、大きくのけぞつた。

「ああ……」

その瞬間、山田は、あえてペニスから口を離し、淳一の精液を自らの顔に受ける。同時に、山田の股間からも、白濁色の液体が噴出し、ホテルの深紅の絨毯の

上に飛び散った。

すべてが終わり、淳一はバスルームでシャワーを浴びた。ガラス張りになった向こうのベッドルームでは、山田が必死になってベルトをはずしていた。

山田がベルトからやっと自由になれたのは、バスから上がった淳一がメイクをすませ、身繕いもすっきり終わった頃だった。

その足許に跪いた山田は、また懇願した。

「女王様、どうぞ、もう一度私めとお会いください」

「お黙り。あたしを充分に満足させることもできずに。お前とはこれきりよ」

「そんなことをおっしやらずに、ぜひ」

「それじゃあ、あたしの言うことを何でも聞くかい？」  
「はい、なんなりと」

山田の言葉に、淳一は、内心ほくそ笑んでいた。

## 第五話 花言葉は初恋

T大付属病院コンピュータシステム導入に関する本契約の調印は、T大医学部の応接室で行なわれた。

T大側からは、病院長でもある学部長、各医局長、

それにシステム導入プロジェクト委員長の山田教授、大和メデイカル側からは、若山専務始め重役連、営業第二課長、末席に、淳一と安岡が連なつた。

二通つくられた契約文書に、学部長と若山専務がサインする。

一カ月間かけて、淳一が山田教授と共に検討してきた文書である。金額の面でも、システムの仕様についても、淳一側の主張がほぼ九十パーセント通つた内容

になっている。

文書の交換が終わると、双方から拍手が起こった。

淳一は、そっと山田の顔を見た。山田は何食わぬ顔で、拍手していた。

一月半前。

女装した淳一が、マゾヒストである山田と初めてホテルに行った翌々日の月曜日。

不転の決意でT大病院を訪れた淳一に対して、山田はいつものように冷たい視線を投げ掛けてきた。

その表情からして、淳一の正体（？）を何も気付いていないことは確かだった。

「山田先生、ぜひうちにおまかせいただけませんか」  
「またその話ですか。私は単なるプロジェクトの代表者というだけで何の権限もないって、何度言ったらわかるんですかね」

「しかし、先生がこうだとおっしゃれば、他の先生方はそれに従うでしょう」

「たとえば、そうだとしてもです。コンピュータの専門会社でもない君のところには任せることは、まずないと  
言っていていいでしょうね。私も忙しいんです。これで失  
礼させてもらいますよ」

山田はそう言って席を立ちかけた。

（今がチャンスだ）

淳一は思った。

ここを逃がしたら、もう言い出す機会はない。

淳一は低い声で、しかしはつきりと言った。

「おだまり！」

その瞬間、山田の体は、中腰のまま硬直した。

「一昨日の夜、あたしにもう一度弄（いじ）めて欲しくて『どんなことでも言うことをきく』と誓ったのは誰だったかしらね？」

淳一の顔を見つめたまま呆然としていた山田は、まるで条件反射でもあるかのように、ソファの前にス  
トンと落ちて、ひざまず 跪いたのだった。

その時、淳一は、一世一代の大勝負に、勝ったことを確信した。

山田は二重の意味で淳一に弱みを握られている。

マゾヒストである山田にとって、淳一は理想の「女王様」だった。久し振りに巡り合った理想的な「パー

トナー」を失いたくはなかった。

そしてまた、T大教授という社会的地位を持つ山田にとつて、マゾヒストで、しかも女装者しか相手にできないという自分の恥部を知られてしまったことは、大きな脅威だった。

翌日、淳一は山田から契約の内諾を得た。

応接室にコーヒーが運ばれ、席は調印後の茶話会に

移っていた。

歓談する双方のメンバーの中で、ただ一人ぶ然とした表情でコーヒーを口に運んでいる人間がいた。

淳一の隣に座る安岡である。

淳一が一人で山田教授を落としたというニュースは、またたく間に社内に伝わった。

淳一が進めてきたこの仕事に、いわば若山専務の横

槍で、安岡が割り込んできたわずか三日後に、仮契約が交されたのだ。実質、安岡が何もしていないことは明白だった。

社員たちは淳一に、ひそかな喝采を贈った。

娘婿に手柄を立てさせようという若山の強引なやり方を、社員たちはけして快く思っていないなかつたのだ。淳一はその若山と安岡を見事に出し抜いたヒーローと  
いうわけだ。

では、若山専務はどうか。

たとえば自分の思惑どおりには運ばなかったにしろ、そこは、経営者である。年商の四割にも及ぶ契約の早期成立が、嬉しくないわけはなかった。

そして結局、とんだピエロになってしまったのが岡だった。将来の経営陣の一人として名を上げるせっかくのチャンスをもらいながら、自分では何も手を下さないうちにことは終ってしまったのだ。

安岡がこの席にひどく居づらそうにしているのも、うなずけるといふものだ。

淳一は、このところ負け続けたライバル安岡との勝負に、会心の逆転ホームーで勝利したわけである。

もちろん、山田と仮契約を交した後、淳一がなんの努力もしていなかったわけではない。

本契約の内容のつめの段階で、打ち合わせと称して

山田は二日とあけずに淳一を呼び出した。

そしてそのたびに、サデイストの女王様になることを要求したのだ。

淳一は社用車を自分専用一台借り出し、そのトラックに女装道具一式を詰め込んで、T大に通うはめになった。

山田の研究室で打ち合わせをした後は、その車でちよつと離れたラブホテルへと向かう。

そこで女装し、山田を弄いぢい、いたぶるというわけだ。

最初の頃こそ、堅物で、かつスノビツシユな山田の  
仮面を剥ぐという快感があつたものの、根っからのサ  
デイストではない淳一にとって、ほどなく、これは苦  
痛になつた。

マゾヒストというのは、一見受身の消極的な性癖に  
見えるが、自分のイメージにかなつた方法で虐いぢめるこ  
とを要求し、しかもその要求がエスカレートしていく

という点で、きわめてエゴイステイックな性癖だ。

山田の機嫌を損ねてはならない淳一は、手を変え品を変え、虐め方を工夫しなければならなかった。

はっきり言って淳一は、しつこい山田の性格に辟易へきえきしていた。

しかし、それも今日で終わりである。

契約がここまで公のものとなった以上、もう、実権は山田の手を離れたと言っている。山田は今後もそう

いう要求をしてくるに違いないが、それにいちいち応える必要はないだろう。たまに、ご機嫌を取ってやればいいのだ。

調印式が終わり、淳一は安岡と共に若山専務の専用車に乗って帰社した。

後部座席で若山専務と会話を交していたのはもっぱら淳一の方。助手席に乗った安岡ではない。

ぶ然とした表情を隠そうと、窓外の景色を眺めている安岡を見やって、淳一はひそかにほくそ笑んだ。

淳一と安岡の社内での力関係が、変わりつつあることは確かだった。

時を同じくして、淳一の私生活にも大きな変化が生じていた。

それは、共同生活を営んでいる相原佳代の淳一に対

する態度が変わったことによるものだ。

といつても、けして冷たくなつたわけではない。今も顔を合わせれば、まるで母娘のように過ごしてはい

る。  
しかし、佳代は確かに変わった。淳一と一緒にいる時間が、極端に減つたのだ。

以前は、アパートの部屋の中でほとんど一日過ごしていたのが、やたら外出することが多くなつた。淳一

が休みの日でも、朝早くからいそいそと出掛けて行く。そして、一度出ると、夜遅くまで帰って来ない。

淳一が毎日遅くまで山田の相手が出来たのは、母親気取りの佳代の目を、気にしなくてもよくなったからだとも言える。

それはまるで、思春期に達した娘が親ばなれし、母親もまた子ばなれしていくような、そんな過程にも見えた。

そして、もうひとつ興味深いことは、それがほとんど同時期におこったということだった。佳代の態度がそんなふうに変わったのは、どうやら淳一が初めて山田と共にラブホテルに行った日、つまり佳代が昔のホステス仲間にあうと言って出掛けた日からしかつた。

その日、佳代の身の上にも何かが起こったに違いない、と淳一は推測していた。以前より生き生きとして、

しかも、そのわけを聞いて欲しくはないというそぶりを見せる佳代に、淳一もあえて問い正そうとは思わなかったが。

仕事が軌道に乗り始めたことが、佳代と過ごす「娘としての時間」から、淳一の気持ちを離れさせる結果にもなっていたのだ。

四月初旬の、そんなある日曜日。淳一が起き出すと、

やはり佳代はもうどこかへ出掛けたあとだった。

淳一は、いつもの休みの日と同じように、シャワーを浴び、メイクし、女装をした。

衿に大きなボータイのついたピンクのワンピースに、明るいグレーのジャケット。ウイッグは、軽く内側へカールしたセミロングだ。

このところ、山田の好みでどきつい服ばかり着ていたので、ひさしぶりに、そんなお嬢様風ファッション

で街を歩いてみたいと思った。

姿見で、もう一度服装のチェックをして、部屋を出ていこうとした時、電話が鳴った。

「はい、……」

何気なく受話器を取ったものの、なんと名乗ってよいものやら困ってしまった。ここは、佳代の部屋だ。

黙っていると、受話器から甘ったるい、しかし元気  
のよい声が聞こえた。

「ハイ。ジュン、元気してる？」

「……あ、なんだ、シェリーか」

淳一の唯一の女装フレンド、シェリーである。

「なんだ、はないでしょ。せっかく電話したのに」

「ごめんごめん」

「ねえ、僕のうちに遊びに来ない？　ちよつとお願い

したいこともあるし」

「お願い……なに？」

「うん、来てからね」

あれ以来、シェリーとは何度か会っているが、シェリーの部屋を尋ねるのはこれが初めてだった。

電話で聞いた道順を頼りに、地下鉄の駅からタクシ―に乗って、着いた所は、満開の桜並木が美しい公園の隣の高級マンションだった。

シェリーはその二階に住んでいた。

ワンルームだとはいえ、畳にしたら十畳はあると思われ  
る部屋だ。賃貸にしても、親から仕送りを受けている身分のシ  
ェリーが、持てるわけはない。やはりパトロン  
の一人がお金をだしているのだろう。

「いい部屋ね」

「うん、わりと気に入ってるんだ」

ソファの淳一の前で、床に直接座ったシェリーが、缶コーラのプル  
トップを引っ張りながら言った。

素肌にじかに着ただぶだぶセーター。そして腰にぴつたりとしたシヨートパンツ。ウイッグもつけていなければ、胸も膨らませていない。それなのに、横座りした白い脚を見ていると、この子が男だとはどうしても思えない。

「……お願いって、なに？」

「え、うん、……」

シェリーは、右手でプルトップをもてあそびながら

言った。

「実はね、……ちよつとまずいことになつちやつたんだ……」

いつもドライな物言いをするシェリーにしては、珍しく言い淀んだしやべり方だった。

「今日ね、ダブルブッキングしちやつてさ……」

「……ダブルブッキング？」

「うん、ある人とデートの約束してたのに、そのこと

コロツと忘れて、他の男のアポ入れちやっただ」

「……同じ時間に？」

「そう。それでさ、ジュンに片一方、助けてもらえな  
いかなと思って」

「あたしが……」

シェリーは、いわば「アマチュアの男娼」である。

シェリーの言うデートとかアポとかいうものが何を意味するかは、淳一にもよくわかった。

「無理に、とは言わないけど……」

「でも、そんなこと、……あたしにできるかしら」

「だいじょうぶだよ、何もむずかしいことないから。」

それに、ジュンにお願いしたいのは若くてかっこいい

方の人だし」

「でも……」

淳一がためらっていると、シェリーはコーラを一気に飲みほし、立ち上がった。

キッチンの屑籠にコーラ缶を投げ捨て、クローゼツトのドアを開き、その前でセーターとショートパンツを脱ぐ。

細いけれど、形の良いヒップにビキニパンティが軽くくいこんでいる。

（この子は、前のものをどうやって処理しているんだろう）

その後ろ姿をぼんやりと見ながら、淳一がそんなこ

とを考えていると、シエリーはブラジジャーのカップにパッドを入れ、手慣れた仕草で背中の中のホックをとめた。もうこの時点で、完璧にハイティーンの女の子に見える。

その上から、キャミソールを着け、とても淳一には着られそうもない、レモンイエローのミニワンピースを着る。

鏡台の前に座り、軽くメイクし、ストレートロング

のウィッグをかぶると、まるで高校生のような可憐な少女の出来上がりである。

「どお？かわいい？」

ポシエットをたすき掛けしながら、振り向いたシエリーは聞いた。

「ええ。すてきよ」

「きょう会う人、ロリコンだから、こういうのスキなんだ」

「ねえ、あたしはどうすれば……」

「ここにいて」

「え？」

「もうじき、その人、ここに来ることになってる」

「え、だって……」

「心配しなくていいよ。根っからの女装者好きだし、優しい人だから」

そう言った時には、既にシェリーは玄関に出て靴を

はいていた。

「僕のベッド、使ってもいいからね。ナイトイもそのひきだしに入ってる」

「ちよ……ちよつと待ってよ」

慌てて立ち上がった淳一が止める間もなく、シェリーはさっさと部屋を出て行ってしまった。

あつという間に、淳一はひとり取り残されていた。

淳一の耳には、出がけに言ったシェリーの言葉が残

響となつて繰り返されていた。

「僕のベッド、使ってもいいからね……」

（それは、つまり……）

はっきりしていることは、もうじきここに一人の男がやって来ること。そして、その男は、明確に、ある目的を持って来るということだ。

（どんな男だろうか？）

もしかしたら、シェリーにここを借りてやっている

パトロンかもしれない……。

(どうしたら、いいんだろう)

このまま、帰ろうかとも思った。淳一は、男といつたらマゾヒストの山田しか知らないのだ。その男と会っていざという時に逃げ出すより、今のうちに帰ってしまった方がいいような気もする。

(でも……)

この部屋から自分が消えてしまえば、あとでシエリ

―がその男から責められるかもしれない。

(…)

突然、とんでもない状況に置かれた淳一の頭の中を様々な考えが駆け巡った。

淳一は、しばらくのあいだ、立ったままためらっていたが、やがて、鏡台の前に座り、化粧を直し始めた。

メイクをし終えて、三十分たっても、まだ男はあらわれなかった。

淳一はソファに腰掛け、そわそわしながら待っていた。

（もしかしたらこれは、シェリーにかつがれたのかも  
しれない）

そんなふうにはさえ思い始めたとき、ドアのチャイムが鳴った。

反射的に、ソファを立った淳一は、二三歩ドアに近づき、立ち止まった。

(どうしよう……)

なんとも形容しがたい恐怖感が襲ってきた。

お化粧はおかしくないだろうか？

服は着崩れていないだろうか？

みっともない女に見えないだろうか？

言葉にすれば、そんな恐怖だった。

音もなくノブが回転する。シェリーは鍵をかけずに  
行ったらしい。

ドアが静かに開き、そこから一人の男が現われる。

その顔を見た途端、淳一は全身が金縛りにあい、息  
が止まりそうになった。

「……や、安岡……」

「やあ……」

口許に笑いを浮かべて立っているのは、安岡だった。

一瞬、淳一は、後ずさった。どこかに隠れようと思つたのだ。しかし、そんなことは無駄だとすぐ気づき、今度は、安岡が立つドアに向かって突進していた。

穿いてきたパンプスをつっかけ、そこを摺り抜けようとした時、安岡の太い腕が、淳一を抱きとめた。

「待てよ、谷沢。僕はすべて知ってるんだ。何も君の趣味をからかいに来たわけじゃない。帰るなら、僕の話聞いてからにしてくれ、頼むよ」

抱きかかえてくる安岡の片方の腕に、ワンピースのウエストあたりを強く引き寄せられ、淳一はなぜか力が萎えていくのを感じた。

「僕も前から、あの店にはちよくちよく出入りしてたんだ。女装者をハントしにね。だから、T大病院の山田教授があそこの常連だったことはよく知ってた」

同じソファの端にふてくされたように座る淳一に対

して、まるで独り言をつぶやくように安岡は語り始めた。

「君が、あんなに早く山田から契約を取り付けたのは、もしかしたら奥の手を使ったのかもしれないって想像もしたよ。でも、最初は、まさか、と思った。君にこんな趣味があるなんて思ってもみななかったしね。でも、なじみのシェリーに聞いてみたら、最近山田に急接近した女装者がいるって話だ。そこで僕は、あの店の奥

の部屋に何日か張って見た。あそこには小さなマジックミラーがついて店の中が見えるって知ってるかい？最初、女装した君を見たとき、それが、あの、いつもクールに仕事をこなしている谷沢だとは信じられなかったよ」

そこまで言うと、安岡はソファを立ち、勝手知ったるという感じで、冷蔵庫からビールを出した。

「それで、シェリーに頼んで、女装の君とふたりきり

であう機会を作ってもらったってわけさ」

ガラスのテーブルにグラスをふたつ並べると、そこへビールを注ぎながら安岡は言った。

「飲む？」

淳一は安岡からさらに顔を背けるようにして、それに応えた。ライバルの安岡に女装姿を見られているという、何とも言いがたい屈辱感もあったが、それよりも、信頼していたシェリーに「はめられた」という憤

りの方が強かった。

「そう……」

安岡は、一方のグラスはからにしたままで、自分のグラスを口に運んだ。

「君の趣味を僕が知らなかったように、君だって僕にそんな趣味があることを知らなかっただろう。お互い、会社じゃあ、お首にも出さなかったってわけだ。僕も、恋人をつくったりして、必死に隠し通してきたから」

グラスを見つめながらそこまで言うと、安岡は残りをひと息に飲みほした。

淳一は、昨秋退社していった小泉真理のことを思い出していた。真理は、四年間も付き合って、安岡との肉体関係はなかったと言っていた。

「僕は、嬉しかったんだよ」

「……？」

淳一は、ソファに座ってから初めて安岡のほうをち

らりと見た。

「白状するよ。僕はずっと君のことが好きだった。いつか君を女装させてみたいと、ひそかに思っていた」  
「え……？」

淳一は、安岡の意外な言葉に、声にならないくらい小さくつぶやいた。

「入社して初めて君に会ったときからずっとさ。この五年間、いつか君をこの道に誘いこもうと思いつけて

きた。でも、君は少しもスキを見せなかつた」

安岡がじつと見つめてきたので、淳一は慌てて、また顔を背けた。

「僕のひそかな幻想の中で、君はいつでも女だったから、君が恋人をつくろうとしたとき、僕は、それを邪魔したんだ」

それこそが、小泉真理のことだった。淳一が真理に声をかけたのと時を同じくして安岡も真理に近付いた

のだ。

「仕事の上で君に出し抜かれたことを、今は少しも悔しいと思っていない。それより何より、こうして女装した君を見られる喜びの方が、僕にとってはずっと大きいんだ」

淳一はまた、安岡の方をうかがうように視線を移した。

安岡は真剣なまなざしで淳一を見つめて言った。

「もつとこつちを向いてくれないか。君の顔を真正面から見たいんだ」

淳一は、恥ずかしげに顔をあげた。

安岡の熱い視線に出会い、パッド入りブラの下で、心臓が、音の聞こえるほどに高鳴った。

「きれいだよ。ほんとにきれいだ。女になった君は、僕が想像していたより、ずっと魅力的だった」

淳一は、自分の頬が紅潮していくのを感じていた。

ふたりは、しばらく見つめ合っていた。

(この人は嘘をついていない)

淳一は、さしたる理由もなくそう思った。

安岡は、大きくひとつ溜め息をつくと、ビールの瓶を持って、また自分のグラスに注いだ。そして、淳一に笑いかけながら言った。

「飲まない？」

「……ええ……いただくわ」

淳一の口から、自然に女言葉が出た。

ソファの位置をずれて、安岡に寄り添って座り直し、グラスをとった。

その時だった。

安岡はビール瓶を置くと、素早く淳一の肩に腕を回し、抱き寄せた。

「あ……」

安岡の両腕が淳一の上半身全体を包むような恰好

で、力強く抱きすくめてきた。

「……だめ」

淳一は、グラスを持ったままの手に力を込めて安岡の胸を押し返し、顔を背けて抵抗した。

「好きなんだ」

安岡の唇が、ピンクの口紅を塗った淳一のそれに重ねられた。

それでも淳一は抵抗をやめなかった。

すると、淳一の手からグラスを奪った安岡は、その手首を掴んで、有無を言わせぬ力強さで自分の股間に持っていた。そして、そこに淳一の掌を押し当てたのだ。

強く押しつけられ、安岡のものが脈打ちながら膨張してくるのが、掌に伝わってきた。ズボンの上からでも、その大きさがよくわかった。

「ほら、もうこんなになってる……」

安岡は、少しだけ唇を離して言った。

淳一は、そう言われてはじめて、それを強く握ってしまっている自分に気がついた。

と同時に、抵抗する意志がすーっと失せていった。

淳一の口は、侵入してくる安岡の舌を受け入れ、もう一方の腕はいつしか安岡の背中にまわっていた。

まるでむさぼるように唇を押しつけてくる安岡に対して、淳一も、最初はおずおずと、やがて大胆に応え

た。

安岡の手が、淳一のシリコンパッドの胸をもみ、そして、順に下へおりていった。スカート裾から忍びこんで、内腿を滑るその手の動きに、淳一は上体を大きくくねらせた。

「……ああ」

いつのまにか、ワンピースの背中中のホックがはずされ、ファスナーが下げられていた。

安岡の唇は、淳一の頬から首筋を這い、その背中にまわった。白いスリップのストラップに沿って安岡の息がおりていく。

「あたし……、あたし、もう……」

全身の肌にまるで高感度のセンサーが仕込まれてでもいるように、淳一の体は反応した。

淳一自身が、自分の肉体の敏感さに驚いていた。そして、体の底の方から沸き上がってくる愉悦に酔い始

めていた。

それは、マゾヒストの山田を相手にしている時には  
けして味わえない、ひとりの女として愛されている喜  
びだった。淳一はもう何も考えることができなかつた。

やがて、安岡の手によってワンピースを脱がされス  
リップ姿になった淳一は、安岡に抱きかかえられるよ  
うにして、ベッドへと導かれた。

すべてが終わわり、シエリーのマンションを出たとき、外はもう暗くなり始めていた。

マンションの隣の、公園の桜並木を、淳一は安岡と肩を並べて歩いた。

初めて男のものに突き貫かれた淳一の秘部は、一歩踏み出すごとにうずいたが、今の淳一にとっては、それすら幸せな痛みに感じられた。

(あたしは、この人に処女を捧げたんだ)

淳一は安岡の顔をそつと見た。

この五年間、職場ではライバルとして張り合ってきた男に対して、そんな感情を抱いている自分が、何かとても奇妙に感じられた。しかし、安岡のテクニクに、女として酔い痴れたこの四時間余りが、これまでの人生の中で、最高の至福の時間だったという実感があつた。

「ねえ……」

「なに？」

「あたしが女になっている間は、あなたのこと、芳樹さんて呼んでもいい？」

淳一の言葉に、安岡はにっこりとうなずいた。

淳一は、安岡の腕に手を回し、頭をその肩に預けて歩いた。

淳一のワンピースと同じ色のソメイヨシノの花吹雪が、ふたりのまわりを包んでいた。

女としての淳一にとって、それは、まぎれもない初恋だった。

第六話 ジュエリーは涙色

「インターフェイスの仕様、通信回線の設置など、ハード面については細部まで段取りが出来ているんですが……」

「問題は、ソフトか」

「というよりも、データベース作成のための人手の確保なんです」

大和メデイカルの小会議室では、T大病院プロジェクトの定例進行点検会議が、若山専務もまじえて行なわれている。プロジェクトの進行状況を、主に若山が聞き、実際に各業者との折衝に当たっている淳一と安岡が答えるという形式である。

「なにせ、この五年間分の保管カルテすべてを、一枚手入力していくんですから、膨大な作業になるわけです」

「しかし、そんなことは、最初からわかってたことだろう」

淳一の言葉に、若山が不満そうに言った。

「そうなんですが、あてにしていたオペレーション依頼業者のうち一社が、約束の人員を出してくれないん

ですよ」

「他のところには、ふれないのかね？」

「ええ、それを今急ぎ当たっているところなんです。

芳：：、安岡、ちよつと例のリスト、見せてくれないか？」

淳一に言われて、テーブルをはさんで座っていた安岡が、一冊のファイルを差し出す。

それを受け取ったとき、ほんの一瞬だったが、淳一

の目の焦点がぼやけ、動きが止まった。

「で、どうなってるんだ？」

若山の催促の言葉に、淳一は我に返って説明を始めた。

仕事は仕事だと割り切っているつもりなのに、このところ淳一は会社で自失状態に陥ることがしばしばある。今も、もう少しでふたつの失敗を犯しそうになっ

た。

安岡のことを思わず「芳樹さん」と呼びそうになり、安岡の手が自分の手に触れただけで、全身の性感が反応してしまったのだ。

シェリーの部屋で安岡に抱かれて以来、淳一の中の歯車がどこか狂い始めていた。

女装している時だけでなく、仕事中にも、時として「ジュン」が顔を出す。安岡と一緒にいると、つい女

つばい仕草になっっている自分に気づく。デスクにいても、安岡の方を見て、あの厚い胸に甘えたいなどと考えていたりする。

同じ課にいるだけならまだしも、目下のところ、同じプロジェクトの推進メンバーなのだ。いきおい、一緒に過ごす時間も、また、会話を交わすことも多くなる。安岡の男らしい体躯や顔を見るたびに、淳一の中の女の部分が勝手に自己主張しだすのだ。

仕事の方は、一部の手違いを除いて、おおむねうまくいっている。だからこそ逆に、緊張感が持続できないのかも知れない。

しかし、確実に言えることは、淳一の中の「女」がどんどん成長し、安岡に恋をしていることだった。

これまで、男としての——つまり会社人としての生活と、プライベートな女装生活をうまくバランスとって送ってきた淳一だったが、ここへきて、なにか人格

分裂を起こし始めているようでもあった。もしかするとそれは、仕事に女装を持ち込んだ山田との関係から、すでに始まっていたのかも知れない。

「今日、何か予定あるの……か？」

小会議室から課へ帰る廊下を安岡と並んで歩きながら、淳一は聞いた。まわりの目をはばかりての男言葉だった。デートの誘いである。

「ああ、英子さんと約束があるんだ」

「……」

淳一は小さくうなずきながら、廊下を行き交う社員たちにも、そして安岡にも気づかれないように、唇を噛んだ。

若山英子との関係は、安岡との二度目のデートの時に聞いてみた。

「ねえ。けしてやきもちじゃないのよ」

ラブホテルのベッドの上。すべてが終わった虚脱感の中にいる安岡の腕の中で、その厚い胸に唇をはわせながら、小さな声で淳一は言った。

「なに？」

「若山専務の娘さんと、婚約したのはなぜなの？」

「なぜって？」

安岡は、淳一のロングヘアのウィッグを撫でながら聞き返した。

「芳樹さん、女は苦手なんでしょ。この前、そう言ったじゃない」

「ああ。しかし、出世の近道が目の前にあれば、誰だってそうするだろ」

「でも……」

「それに、彼女とは、言ってみれば取り引き関係なんだ」

「取り引き？」

「ああ、僕は出世を、彼女は自由を手に入れるために結婚するってわけさ」

「どういうこと？」

「ま、いいじゃないか。いくら僕がジュンのこと好きだって、結婚するわけにはいかないだろ」

安岡は、そう言いながら、淳一の唇を塞いだ。

淳一は、もつとつっこんで聞きたかったのだが、口の中に差し込まれた安岡の舌に応えることについて

夢中になり、それ以上の追及はできなかつた。

仕事が終わわり、淳一が一階のロビーに降りてくると、若山英子がいた。

先に降りた安岡と笑顔で話している。

淳一は、とっさに柱の陰に隠れた。

淳一の見守る前を、ふたりは仲良さそうに腕を組んで出て行った。

（なにが取り引き関係よ。嘘ばっかり）

それはまるで、不倫の相手を見つめるOLのような  
眼差しだった。

その日、アパートに帰ると、めずらしく、相原佳代  
は部屋にいた。

二ヶ月ほど前から始まった佳代の外出も、最近ほ  
とんど毎日のようになっていいる。そして近ごろでは、

淳一よりも遅く帰ってくることが多い。それどころか、外泊することすらあるのだ。

「ジュンちゃん、ちよつと話があるの」

いつものようにバスを使い、スリッパ姿で鏡台に向かってしていると、その後ろで、淳一のプリーツスカートにアイロンをかけてくれていた佳代が言った。

「なに？」

パープルのアイシャドーを綿棒でぼかしながら、淳

一は聞いた。

スカートをハンガーに吊すと、佳代は、後ろに立って、ブラシで淳一のウイッグをとかし始めた。

「ジュンちゃん、最近、ほんとに女っぽくなったわね」  
「なんなの、ママったら、突然」

淳一は、自分が安岡に恋していることを、佳代に見すかされているのではないかと、どきりとした。しかし、次に佳代の口から出た言葉は、もつと意外なもの

だった。

「もう、私がいなくても、大丈夫よね」

「え？　　どういうこと？」

「私、ここを出ていこうかと思うの」

「！」

淳一がメイクの手をとめ、鏡の中の佳代を見上げる  
と、佳代はまるで少女のようにはにかんで言った。

「私、結婚しようかと思うのよ」

「えっ！」

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。私だって女よ。一度くらい誰かの奥さんになっても悪くはないと思うけど」

「でも……、いったい誰と？」

「ジュンちゃんにはいつか言わなくちゃと思ってたんだけど、なんだか恥ずかしくてね。私、三ヶ月ほど前に昔の友達に会いに行つたことがあるでしょ」

「ええ、覚えてるわ」

淳一もその日、女装スナックへ行き、マゾヒストの山田教授と会ったのだ。

「あの日、むかし一緒にホステスやってた友達と話しててね。その子はいま、ある政治家の二号さんになってるんだけど：：その子から、私が若いころに好きだった人が、最近奥様を亡くされて、一人暮らしをしてるって聞いたの」

「ママの、好きだった人……？」

「ええ。私が銀座のクラブでナンバーワンだった頃だから、今から二十何年か前よ。あの人はまだ若手の代議士で、やっと政治の世界の駆引きにも馴れてきたって感じだった」

佳代は、遠くを見るような眼差しで言った。

「それで、その人と会ったのね」

「矢も盾もたまらなくなっちゃって、翌日電話をした

の。最初は外で会ってただけど、そのうちに、彼が東京暮らしをしている時に使ってるお屋敷にお邪魔して、あれこれお世話するようになって……」

「プロポーズされたの？」

「八十近いお爺さんと、五十過ぎのお婆さんが、プロポーズもないもんだけどねえ。ちゃんと籍を入れるから、いっしょに暮らしてくれって……」

佳代は、しきりに照れた。

ちよつとの間、考えをめぐらせていた淳一が言った。

「ねえ、ママ、今日は晩御飯の用意、まだなんでしょ」

「ええ、ジュンちゃんになんて話そうか、あれこれ考えてたものだから」

「外へ食べに出ない？」

「どうして？」

「決まってるじゃない。ママの婚約祝いよ」

一時間後、ふたりはタクシーを飛ばして、郊外のフランス料理店に着いた。

ふたりとも、思いつ切りのお洒落をしていた。佳代は芥子色の粹な小紋。淳一は、衿ぐりの大きく開いたワインレッドのワンピース。胸元に大玉の真珠のネックレスをあしらっている。

「ママ、おめでとう」

ボーイに案内されて席に着くと、ふたりはさっそく、

グラスに満たしたドンペリニオンで乾杯した。

「それにしても、二十何年かぶりで焼けぼっくりに火がつくなんて、ママもすみ置きに置けないわね」

淳一がからかうと、けっしてシャンパンだけのせいではなく、頬を染めた佳代が言った。

「私、あんまり、男には惚れないタイプなのよ。でも、その人のことはほんとに好きだったの。一生に一度の恋だったって言うてもいいくらいに……」

「ママ、きれいよ」

佳代は、いよいよ赤くなつた。

ふだんのさっぱりした物言いからは想像もつかないくらいに初々しい感じの佳代が、淳一にはよく理解で  
きた。自分自身も今、恋しているからだろう。

フルコースの食事をしながら、淳一は佳代の「彼」  
について、あれこれ聞いた。最初、佳代は言い渋って  
いたが、せつつかれて白状したその名に、さすがの淳

一もちよつと驚いた。佳代の相手というのは、大臣経  
験もある保守党の大物政治家、早瀬大造だったのだ。

デザートのアイスクリームをつついているとき、佳  
代が言った。

「ほんとに、これから、ひとりで大丈夫？」

「平気よ。女としてのたしなみは、もう、ママにじゅ  
うぶん仕込まれたもの」

佳代は、淳一の言葉に苦笑した。

「ジュンちゃん見てると、まるで私の若い頃を見てるみたいなのよね」

「えっ。初めて聞いたわ。あたし、ママの若い頃に似てるの？」

「そうね、あなたを女として育ててみようと思ったのは、私に似てたからかも知れないわ。磨けば光る、化粧映えのする顔なの」

「もしかしたらそれって、根は美人じゃないってこ

と？」

「そうは言っていないわよ。だけど、ジュンちゃんは、ほんとは男の子だもの。私も若い頃は痩せこけて、男みみたいな顔と体をしてたのよ」

「へえ、そうなの」

「そうよ。ホステスになりたての頃は、色気がないなんて、さんざん言われたもの。ジュンちゃんは、私なんかよりずっと成長がはやかったわ。たった半年で、

お化粧はうまくなつたし、身のこなしも女っぽくなつて。あなたはもう一人前の女よ。このレストランの中にこれだけ人がいて、ジュンちゃんのこと、男だつて気づいてる人なんて、ひとりもないんだから」

「ママつたら、そんなこと、大きな声で言わないでよ」  
「でもね、ジュンちゃん。これまで教えてきたことと逆のこと言うみたいだけど、女になりきつちやだめよ」

「……？ どういうこと？」

「女は弱いわ。私、この年までひとりで頑張ってきたのに、好きな人が目の前に現われたとたん、これまでの生き方なんてどうでもよくなってしまっただもの。冷静に考えれば、政治家の女房になったって、苦労ばかりで、少しもいいことなんてないのにね。ひとりで暮らせるならその方が気楽にきまつてるんだもの」

「でも、ママ、幸せそうよ」

「そ、女は幸せに弱い。それで目が眩むのよ。ジュ

ンちゃんはほんとは男なんだから、女になりきって何もかも失くしてしまいうなんてことにならないようにね」

「ママ、目尻下げてそんなこと言ったって、説得力ないわよ」

淳一は、コケティッシュにウインクしてみせた。

五月晴れの憲法記念日。佳代は住み慣れたアパート

を引き払って、引越して行つた。

淳一はまた、二階の自分の部屋で一人で暮らすことになつた。

佳代と暮らしている間に買い揃えたものと、淳一のためにと佳代が残していったものとの、以前女装用品をしまっていた寝室だけでは足りなくなり、もうひとつの部屋も、女性用の衣類でいっぱいになつた。もう、どこから見ても、若い女性の部屋だ。

五月四日、淳一はさまざまな食料品と、たくさんの花を買いに出た。

実は、土日へと続く連休の後半、この部屋でいっしよに過ごす約束を、安岡と交わっていた。そのため買い物である。佳代がいる時には、とてもできなかつたことだ。

五日の朝、淳一は早くから起きて、バスに入り、体

中をきれいに脱毛した。

入念に、しかし濃くはならないようにメイクし、シリコンパッド入りのブラに、ショーツ、スリッパと、すべて白の下着をつけた。

服は、細かい花柄の半袖ブラウス。そして白いプリーツスカート。その上から白のサマーカーデガンをはおった。

白いものが多くなったのは、もしかしたらウエディ

ングドレスからの連想だったかも知れない。今日から四日間、安岡との「新婚生活」が始まるのだ。

ヘアスタイルは、セミロングのボブ。ウィッグの上からヘアバンドをし、前髪をかわいらしく揃える。

その後、昼までは、ピンクのサロンエプロンを着けて、キッチンに立った。クッキーを焼いたり、お手製のアイスクリームを作ったり、手のこんだ昼食の支度をしたりしながら、安岡を待つ。

以前、週末にひとりで女装していた時、女の子になったつもりで料理を作っていた経験が役に立った。あの頃は、自分のために作っていたのだが、今はもちろん「彼」のためである。

まるで初々しい新妻のように、淳一はうきうきと動き回った。

小鍋の中でパンプキンスープがいい匂いをたて始めたころ、アパートの表の道路に車の停まる音がした。

キッチン窓からそつとのぞくと、安岡がリボンの  
かかった小箱を持って、スポーツタイプの車から降り  
てきた。

あわててエプロンをとり、鏡台の前まで行って、髪  
の乱れを直す。

料理の味見をしたせいでムラになった口紅を、右手  
の小指を立ててのばす。

ティッシュで小指を拭き取ったところで、チャイム

が鳴った。

チェーンロックをはずすと、安岡が入ってきた。淳一は、その首にすぐさま抱きついた。

甘えたようにキスをせがむ。

日ごろ会社でじらされているせいで、女として安岡に会ったとたん、いつもこうなるのだ。

安岡は一八二センチ。九センチの身長差は、淳一がスリッパの足で可愛らしく背伸びしてみせるのに十分

だった。

「……いらっしやい」

三分間は続いたと思われるキスの後、安岡の胸に甘えながら淳一は言った。

「お、すごいじゃない」

淳一を抱きかかえるようにしてキッチンへ入った安岡は、花瓶に生けられた薔薇の花と、しゃれた手料理でいっぱいテーブルの上を見て言った。

「芳樹さんの口に合うといいけど。すぐ、召し上がる？」

「うん、朝からずっと何も食べずにこれをさがしてたんで、腹ぺこさ」

安岡はそう言って、手に持っていた小箱を差し出した。

「サイズがわからないんで苦労したよ。合わなかったら、直してもらおうといい」

「なあに？」

「あけてごらん」

受け取った淳一は、リボンをとき、箱の中から出てきたケースをあけた。

深い青色の宝石がついた指輪だった。

「サファイヤ。ジュンの誕生石だろ。はめてみて」

淳一はその指輪を手にとり、左手の薬指にはめた。

それは、驚くほどぴったりと指のつけ根にはまった。

淳一は手をかざすようにして、その青い石に見入った。

「……ん？　馬鹿だなあ。なにも泣くことないじゃないか。そんなに高いもんじゃないよ」

淳一の頬を、自分でも気がつかないうちに大粒の涙がつつたっていた。

安岡は、淳一の体をもう一度しっかりと抱きしめ、唇でその涙をぬぐった。

淳一は、この上もない幸せに、自分が溶けていってしまうような気がした。

その日、淳一は、安岡のために食事を作り、一緒に風呂に入って安岡の背中を流し、安岡の脱いだシャツや下着を洗濯し……、本当に新婚の妻のように一日を過ごした。

ネグリジェ姿で夕飯の片付けをしていると、居間で

テレビを見ていたはずの安岡が、背後から忍び寄ってきて、いきなりその体を抱きしめた。

「ううん……」

淳一は、思わず上半身をくねらせた。

淳一の腰骨のあたりに、固くなって脈打つ安岡のものがはつきりと感じとれた。安岡は、淳一の首筋に唇を這わせながら、右手をその太腿に持つていき、ネグリジェの裾をたくしあげた。

「いや……だめよ。これ、片付けなくちや……」

淳一は体をひねって、安岡の唇に軽くキスしながら言った。

「そんなのいいじゃない、明日で」

安岡の手は、淳一の内腿を這い上がり、その秘部に触れた。淳一のものも、ショーツの中で怒張しきって  
いた。

「もお……バカ」

淳一は、差入れてくる安岡の舌を受け入れながら、ふきんで手をぬぐうと、その体を安岡にあずけた。

安岡は淳一を抱きかかえ、深いキスをしたまままでベツドへと連れ込んだ。

そんなことまでが、まるで若い夫婦のようだった。

つぎの日は、安岡の車でデイズニーランドまでドライブした。

もっぱら鏡に向かって女装していて、写真を持っていないという淳一のために、安岡は、自分の一眼レフを持ち出し、撮ってくれた。

一時間仕上げのDPEに出して、食事をしている間にカラープリントはできあがった。

フレームの中には、かわいらしい黒のジャンパーズカートを着た淳一が、ミニーやグーフィーと並んで、恥ずかしげに微笑んでいた。

撮られることにすっかり味をしめた淳一は、三日目、安岡にねだって、一日中、さまざまな服や着物を着た写真を撮ってもらった。

安岡の方も、カメラマン気どりで、ポーズをつけた。

「きれいだよ」「かわいいよ」という安岡の言葉にせられ、淳一は、自分がファッション雑誌のモデルにでもなったような気がした。

そんなことをしていたせいで、その日、昼食をとつ

たのは、もう四時をまわった頃だった。

「下着姿も撮ろうか？」

食後の一服をつけながら、安岡が言った。

「え、：：でも：：」

淳一が驚いて言うと、安岡はわざと煙草の煙を吹きかけてきながら：：：

「ジュンは僕と同じ年だから、二十六。素肌を撮れるのも今が限界じゃないかな。そのうち、張りもなくな

るし、シミも浮く。腹だつて出てくるだろ」

「もお、意地悪なことばかり」

淳一は、ちよつとふくれてみせた。

スリップ姿でベッドに横座りした淳一に、ストロボの光が浴びせられる。

「体をもう少しひねって。そう、肩ごしにこっちを見るんだ。」

「口を少し開いて」

「右手で髪をかきあげてごらん」

「いいね。セクシーだよ」

安岡は淳一にポーズをつけながら、矢継ぎ早にシヤッターを切った。

この三日の間に、淳一は何度となく安岡の前で下着姿になっている。しかしそれは、至近距離で、抱かれるためにそうしたのだ。

今はまったく事情が違っていた。安岡は淳一から距離を置き、ファインダーの向こうから冷徹に観察している。素肌を射るようなストロボの光の中で、淳一はまったく無防備だった。むき出しになった肩が、そこにかかったスリツップの細いストラップとともに、自分自身を頼りなく感じさせた。

そして、そんな頼りない受け身の感覚が、抱かれていますとは違った種類の興奮をよびおこしてもい

た。

「スリッパも脱いでみよう」

「ブラジャーの肩紐を腕のところまでずり下げて」

淳一は「視姦」という言葉を思い出した。カメラのレンズという名の、太くて冷たいペニス。その暴力的な力の前に、今、淳一の体は無抵抗にさらされている。

「ブラもショーツもとって全裸になりなさい」

「髪を前にたらしめて、胸を隠すんだ」

安岡の言葉の端々に、命令口調が混じりだした。

淳一は、その言葉に従わざるを得ない。意識の上での恥ずかしさや、命令されることへの抵抗感とは相反して、肉体がそれを嬉々として受け入れていく。その証拠に、安岡の声がとぶたびに、淳一のペニスはいくらも怒張した。

「右手でそれを握るんだ」

「オナニーしてみなさい」

淳一はその言葉に従って、ペニスを握った手を前後に動かし、しごいた。

安岡が持つカメラからは、相変わらずシヤッター音が響き続けている。

淳一の意識の中で、これ以上ないほどの恥ずかしさと、信じられないほどの快感が闘っていた。それが、淳一の体を自然に揺り動かした。

カメラの前で淳一は、虚ろな目をし、口を半開きに

して、上体をくねらせながらオナニーしている。

「ねえ、もう……許して。抱いて」

絶頂に登りつめようとする快感の中、かすれた声で、  
やっとそれだけ言えた。

シャツターを切る手を止めた安岡は、ベッドに近づくと、悶える淳一を眺めながら、それを楽しむかのよう  
に、ゆっくりと服を脱いだ。

「意地……悪……」

ベッドに仰向けに寝た淳一は、もうオナニーを続け  
てはいないにもかかわらず、安岡の体が待ちきれない  
というように全身をくねらせ、言った。

全裸になった安岡は、淳一の上に馬乗りになる。

しかし、淳一の期待に反して抱きしめてはくれない。  
腰を浮かして、いきり立ったペニスで、淳一の体をな  
ぶるように撫でまわしはじめたのだ。

腰骨からウエストへ、そして胸へ。淳一の小さな乳

首に、その先を何度もこすりつける。

（ああ、乳房があつたら……）

淳一は、思った。

（もし、大きくて柔らかな本物の乳房があつたなら、この人のものを胸の谷間にはさんで、両側から包みこんであげられるのに……）

淳一の目から、悦楽とも悔しさとも区別のつかない涙が流れた。

「くわえてくれ」

安岡が言った。

真っ赤なマニキュアの指を添え、淳一は、血管が浮きだして節くれだったそれにむしやぶりついた。

淳一の口腔の中でそれはさらに大きさを増した。腰を動かす安岡に合わせ、淳一も必死の思いで前後に首を振る。

（あたしは、この人に征服されたんだ。あたしは、こ

の人の「女」……)

最大限に怒張した安岡のものを握る淳一の指に、サファイヤが光っていた。淳一の瞳が、また涙でにじんで、その深く青い光がぼやけていく。

むせ返りそうな息苦しさの中で、淳一の意識は、その悦びの渦に巻き込まれ、次第に空白になっていった。

だから、安岡がまたカメラに手を伸ばし、レンズを向けて、ストロボを焚いたときにも、その肉棒をくわ

えたまま、イヤイヤをしただけだった。

まるで夢のようだった連休が終わり、営業マンとしての日常が戻ってきた。T大病院のプロジェクトも第一次システム導入の山場を向かえ、淳一は仕事に忙殺された。

安岡とともに過ごす「女の時間」を持ちたいのはやまやまだだったが、五月いっぱいには、土日にも出勤を余

儀なくされるといいう忙しさだった。

その波が一段落した、六月はじめのある昼休みのことだ。

淳一は、本社ビルの地下の喫茶店で昼食をとりながら、ひとりぼんやりと考えていた。

その前日から、安岡は会社を休んでいた。体調が悪くしばらく休みたいとの連絡が入っているという話だ。

（お見舞いに行つて、いろいろと世話をしてあげたい）  
淳一は思った。

（今日、仕事を早めに終えて、アパートを尋ねてみよう。できたら、女装して行きたい。その方が、きっとあの人も喜ぶに違いない）

そんなことをあれこれ考えていたとき、衝立をはさんだ後ろの席から聞き慣れた声が耳に入ってきた。妙に秘密めかした、だからこそ、よけいに耳につくよう

な、そんなしやべり方だ。

「……面白いもの、見せてやろうか」

同じ課の営業マン、前田だった。

「なんだ、それ。昼間からエロ写真か」

相手はどうやら、前田と同期入社 of 営業第一課の課員らしい。

「ま、とにかく見てみるよ。これ、誰だかわかるか？」

「なんか、妙に媚びた表情の女だな。ビデオモデルに

「しちや、いまいちだし」

「谷沢さんだよ。うちの課の」

「えっ？」

「ホモらしいんだ、あの人」

「ウソお。谷沢って、あのT大の大型受注決めた人だろ。これ、女装してるってわけ？」

「ああ、どうもそのT大からの受注も、その趣味のおかげらしいぜ。あそこの山田って教授がお仲間でさ。」

そいつに尻貸して、受注取り付けたって話だ」

「ゲイは身を助くってか？ やだやだ」

「もつと、すげえの、あるんだ」

「ん？：：なんだ、これ」

「男のナニをくわえてるってわけさ」

「おいおい、昼飯食ったばっかだぜ。勘弁してよ……」

コーヒークップを持った淳一の手がわなわなと震え

た。

二人が話題にしている写真がどんなものか、そして、それを前田に渡したのが誰なのか、淳一は一瞬のうちに理解した。

自分は安岡にだまされていたのだ。

（入社したときから、僕のことが好きだったって？

そんな、うまい話があるものか……）

淳一は、自分のうかつさを恥じた。

安岡はライバルなのだ。

佳代が言っていたように、女になりきることで、恋に溺れ、冷静な判断ができなくなってしまうっていたのだ。

ふと気がつくと、その喫茶店のその席は、半年前、小泉真理が安岡に捨てられたと泣いていた場所だった。

その日の帰り道、淳一は、女装していないときも肌

身離さず持っていたサファイアの指輪を、地下鉄の屑入れに捨てた。

どうせ、イミテーションに違いない。

第七話 梅雨明けはアラベスク

「……かような次第で、取締役会の皆さんの御推挙を受け、不肖私が、社長の任を引き受けさせていただけることになったわけでございます。病床の兄の思いを引

き継ぎ、日本医療の近代化、エレクトロニクス化のため、微力ながら……」

若山新社長のスピーチが続いている。

七月はじめのある金曜日、招待ゴルフコンペも兼ねた大和メデイカルの新社長就任披露パーティが、山梨県のホテルで行なわれていた。

政財界の要人や納入先の病院理事、仕入れ先の海外医療機器メーカー日本支社長や、大株主など、参加者

の総勢は三百人近くにも達していた。

大和メデイカルの社員では、課長職以上と、今期めざましい業績をあげた一般社員が呼ばれている。

だから、ここに来ているヒラの社員は、当然、誇らしげに振舞っているはずだった。ところが淳一は、そんな華やかで和やかな会場の片隅に、浮かない顔で立っていた。

「どうやら谷沢はホモらしい」という噂は、またたく間に社内を駆け巡った。

前田から例の写真を見せられた人間も、実際、何人かはいるようだが、その数はさほど多くなさそうだ。

しかし、そこから始まった噂は、いつの間にか、いろいろと尾ひれがついて、人の口にのぼるようになっていた。

「新入社員の誰それに声をかけていた」だの、「ホモ

バーでアルバイトしていたのを見た」だの、はては「あいつはエイズのキャリアーだから近づかないほうがいい」だのと、淳一にはまったく身に覚えのないことまで、まことしやかにささやかれているようだった。

「僕は君の味方だからね」などと耳もとに話しかけてくる経理課の窓際社員や、あけすけにモーションをかけてくる取引メーカーの社長さえいた。

社員の間でこれだけとりざたされていることが、管

理職の耳に届いていないわけはない。直属の営業第二課長はもちろん、若山新社長さえも知っていると考えた方がよさそうだ。

ホモだということを理由にクビにはできないだろうが、若山は必要以上に世評を気にする人間である。九月の異動で、福岡支社あたりに配転を命じられないと限定らない。もはや淳一は絶体絶命の危機に立たされているのだ。

「……それでは皆さんお待ちかね、今日のコンペの表彰式に移ります……」

若山のスピーチが終わると、司会者が言い、場内から拍手が起こった。

淳一も日中は、このホテルのコースでラウンドした。淳一の組は、米メーカー日本支社長のアメリカ人夫妻と、若山の娘、英子の四人。

淳一にとっては接待ゴルフということになるのだが、「接待」も「ゴルフ」も、からきしいところはなかった。

英会話ができないわけではないが、フランクなジョークを交えた会話までは、とても無理だ。アメリカ人二人は、当然、留学経験のある英子とばかり話すことになる。

そのうえ、相当なハンデをもらいながら、あわやブ

ービー賞というゴルフの腕前である。けつきよくあとの三人の足手まといにしかならなかった。

それにも増して、淳一は例の深刻な問題を抱えている。とてもゴルフに熱中する余裕などなかったのだ。

本来なら、英子と組むこの役はフィアンセの安岡がやっていたはずだ。

淳一は苦々しい思いで安岡のことを考えた。

実は、淳一はあれ以来、安岡と顔を合わせていない。「体調が悪い」と、数日会社を休んだ安岡は、その後、唐突にどこかへ長期出張に出てしまった。何かの「特命」を受けての出張ということだったが、課長すら、その「特命」の内容を知らされてはいない様子だ。

T大病院プロジェクトで、安岡に手柄を立てさせそこねた若山が、今度は、ドイツのメーカーとの合弁事業契約締結のため、急きよ現地に送り込んだのだ、と

いうのが社内すずめたちのもっぱらの観測だった。

たぶん安岡は、内々にその特命を受けた時点で、淳一の女装写真を撮ることを思い立ったのだらう。

それを同じ大学の後輩であり、腰ぎんちやく的存在である前田に渡し、自分が海外へ行っているうちに、淳一を駆逐してしまおうと考えたのだ。

最初淳一は、安岡がそんなことをしたのは、T大病院の件で淳一に出し抜かれたことへの腹いせなのだ

思っていた。しかし、よくよく考えてみると、単純な恨みだけでの行動とは思いにくい。安岡のやったことは、一歩間違えば自分自身をも危うくしてしまうようなりスキーな行動なのだ。万一、写真の出所を詮索されれば、自分だって淳一と同じ立場に立たされることになる。

それだけのリスクを払ってまで安岡が狙ったのは、明らかに淳一の失脚だ。将来を約束された安岡にとつ

て、自分を必要以上にライバル視してくる淳一は、危険な存在に思えたのだ。T大病院の一件もあり、いつ自分が足をすくわれるかわからない。それなら今のうちにその芽を摘み取ってしまおうという考えに違いなかった。

場内の拍手が、一段と高まった。

ゴルフコンペレデイスの部の優勝者として、若山英

子が紹介されたのだ。

司会者に促され、スポットライトを浴びながら、英子がステージに上がる。

昼間のシンプルでスポーティなキュロットスカートとはがらりと変わったあでやかな装いに、場内からため息がもれた。ワンショルダーのイブニングドレスは鮮やかな赤。むき出しになった片肌がライトの光に白く輝いている。たぶんウィッグだろう、いつものワン

レングスとは違うボリユームをもたせた栗色のカーリーヘアが、そのドレスとマッチして、長身の彼女をいやがうえにも華麗に見せていた。

英子は、自分の父、若山新社長から優勝トロフィーを受け取ると、頬にキスをした。その洗練され、しかもコケティッシュな仕草と、対照的にさかんに照れている若山の姿に、場内は爆笑に包まれた。さわやかな笑顔を投げかけ降壇する英子の姿は、若山自身のスピ

イチ以上に、「新社長」の存在を来賓たちに印象づけたようだった。

(……そういえばあたし、イブニングって着たことなかったわ……)

美しい英子に見とれ、ついそんなことを考えていた自分に気づき、淳一は強くかぶりを振った。

(いけない、そんなこと忘れるんだ)

安岡の企みを知ったときから、淳一はすっぱりと女

装をやめていた。女装用品もすべて処分してしまった。自分にとって女装は、単なる趣味のはずだった。趣味の世界が実人生を狂わせてしまうのなら、その趣味を捨てるのが当然だろう。今、淳一は無理やりにも、そう思おうとしていた。

バンドが生演奏を始め、参加者たちが歓談に入ったあとも、淳一は、どのグループにもとけ込めず、一人で水割りをなめていた。ビジネスマンとしての将来を

考えるなら、参加者に顔売っておくいいチャンスなのだが……

（こんな状況を打開できる決め手が、なにかきつとあるはずだ）

場内の人々の動きをぼんやりと見ながら、淳一はあてのない考えをめぐらせていた。

そのおかげで、たぶん一般の参加者は誰一人として気にとめなかっただろうちよつとした異変に、気づい

た。

最初、総務部長が、立食形式で歓談する各グループを順番にまわり、そこにいる役員に何気ないそぶりでも耳打ちをしていた。役員たちは、一瞬顔をこわばらせたとあと、何事もなかったかのように話に戻った。しかし、十分もしないうちに、一人また一人とホールから姿を消し、最後には主役のはずの若山までがいなくなってしまうた。

そんな役員不在の状況が五分ほど続いただろうか。今度は、先刻と同様にさみだれ式に、役員たちが戻ってきた。そして、あたかもいま他のグループから移動してきたかのようなそぶりです、どこかのグループに加わったのだ。

会社にとって重要な何か起きた。淳一はそう直感した。もちろん、それがなんであるかは、わからなかったが。

「元気がないみたいですね」

とつぜん背後から話しかけられ、ぎくりとした。振り返ると、そこに若山英子が立っていた。

「あ、い……いえ……」

淳一は、かろうじて笑顔をつくった。

「今日のゴルフを反省してたんですよ」

「ゴルフなさるのは三年ぶりとかおっしやってたでし

よ。無理ありませんわ」

「いやあ、大病院の先生方を相手に商売をやってるんです。本当ならゴルフくらいできなきやいけないんですよ」

「ゴルフなんてする暇がないくらいに、打ち込んでらっしゃる趣味を、他にお持ちなのかしら？」

どこか探るような眼差しで英子が言った。

「い、いや、そういうわけでは……」

(彼女は知っている)

淳一はそう思った。敏感になっている淳一の頭の中で、警報が鳴り響いた。

しかし英子は、その話題にはそれ以上つつこんではこずに、魅力的な笑顔を向けてこんなことを言った。

「谷沢さんとは、いちどゆっくりとお話がしたいわ。

私、最初にお会いしたときから、あなたには興味がありましたのよ」

「それは光栄ですね」

「それに私には、あなたにお詫びしなきゃいけないことが  
とがあるように思うの」

「えっ？ どういう……ことですか？」

「もしよろしかったら、ここ、出ませんか？ こんなパ  
ーティ、つまらないでしょ」

英子は、笑顔の中に不可解な表情を紛れ込ませて、  
少し首をかしげた。

淳一は、英子の誘いをバーラウンジかどこかで話したいということだと思っていた。だから、英子に従ってついたところが、最上階のスイートルーム、つまり英子の部屋だったのには、いささか驚いた。

部屋に入ると英子は、淳一をソファに座らせ、冷蔵庫からウイスキーの小瓶を出してきて、自分も腰掛けた。

「氷がないから、ストレートでいいかしら？」

「ええ」

ウイスキーをグラスに注ぐ英子を見ながら、淳一は落ちつかなかった。ホテルの部屋に社長令嬢とたった二人でいるのだ。しかも、隣室は、その社長の部屋なのである。

「そのドレス、よくお似合いですね」

間が持てずに、淳一が口を開いた。

「それは光栄ですわ」

英子は、グラスを差し出ししながら、先刻の淳一の口調をまねて言った。そして、こうつけ加えた。

「たぶん、あなたにも、ね」

「え……！」

グラスを受け取ろうとして出した淳一の手が滑り、テーブルの上にウイスキーがこぼれた。

サイドテーブルのティッシュの箱を取った英子は、

狼狽する淳一の反応を楽しむかのように、いたずらっぽい笑顔で、テーブルを拭いた。

「着てみたいでしょ？」

「え、英子さん：：冗談はよしてください」

淳一は、喉を詰まらせながら言った。

「ふふ、ごめんなさい」

英子は、ティッシュを屑籠に捨てると、ちよつと肩をすくめた。

「からかうつもりじゃなかったんだけど、あなたを見てたら、ついね。でも、けっして冗談じゃないのよ。

私、あなたがこれを着たところを見てみたいわ」

「で、ですから……」

「私、何もかも知ってるの。そうね、たとえば、こんな言い方はどうかしら？ 私があなたと話したのは、

今日で何回目？」

「え？ ええ。以前、安岡に会社のロビーで紹介され

たとき以来ですから、二度目のはずですけれど」

「そうね、あなたは、私が落とした手袋を拾ってくださったのよね。でも、あれがはじめてじゃないですよ？」

「……え？」

「今年の初詣の時、神宮の社務所の前で、やはり私のハンカチを拾ってくださった。確かあの時、あなたは蝶々の模様をついた藤色の振袖を着てらしたと思うけ

ど、ちがうかしら？」

「……」

「あの時、あなたのことをきれいな人だと思ったわ。でも声を聞いて、もしかしたら男の人かもしれないって、ずっと気になっていたの。だから、二度目の時、男の姿のあなたが『落ちましたよ』と言ったのを聞いて、すぐにあの時の人だって気がついたのよ」

英子の言葉に、淳一はただただ驚いていた。あの時

点で、見破られていたとは……

「あなたに女装趣味があるらしいということを、芳樹さんに話したのは私よ。あなたとつき合ってみたらつてすすめたのも、じつは私なの」

淳一の頭の中は完全に混乱した。英子はいったい何を考えているのだろうか。

確かに、安岡が女装の淳一に近づいた経緯には不自然なところが多い。

安岡は、シエリーから聞いたというような説明をしていたが、シエリーはあの時点で、淳一と安岡が同じ会社の人間だということを知らなかつたはずだ。シエリーが話したのは「T大の山田教授に近づいた女装者がいる」ということだけだろう。その言葉から安岡が、即座にそれを淳一のことだと判断したというのは、いくらなんでも無理が多い。以前から、それを不思議に思っていたのだが、そこに淳一の女装癖を知っていた

英子という存在が介在するなら、とりあえず、説明はつくのだ。

しかし、だとすると、もつと不可解な疑問が出てくる。

英子は安岡の婚約者である。自分のフィアンセに女装者とつき合うようにすすめる女がどこの世界にいるだろうか……

「あなたと安岡とは、いったい、どんな関係なんですか？」

「そうね。まず私のことを話さなくちや、フェアじゃないわね。私、実はレズなの」

「……え？」

淳一は、英子のあつけらかなとした言い方に、一瞬、彼女が何を言ったのか理解できなかつた。

「完全なレスビアン。男の人を好きになつたことはないの。高校まではずっと女子校だったし、もともとそういうケはあつたんだと思うわ。でも決定的になつた

のは留学時代。シスコ郊外の大学のドミトリーでルームメイトだったアメリカ人の子にその道を教えられたの」

英子のような令嬢の口から、そんなことを聞かされ、むしろうろたえているのは淳一の方だった。

「もちろん、父や母はそんなこと知らないから、日本に帰ってきたら、山のような結婚話が待ち受けていた。取り引き銀行の頭取の息子とか、大病院の副院長とか。

もつとも父の望みは、なにより後継者を見つけたいということだったから、私はおもに会社の人とお見合いさせられたの。でも、どうしても男の人を好きにはなれない。だから、あれこれ難癖をつけては、お断りしてた。だけど、それも限度があるでしょ。もう家飛び出すかしかかないなと思っていたころ、芳樹さんとお見合いしたというわけ。でも、彼は他の人とすこしちがってた。二人になるなり、『お父さんには絶対言わ

ないでほしいけれど、僕はホモだからあなたとは結婚できない』と言ったの。私は彼に親近感を覚えた。それで私のことも話して、偽装結婚することにしたの」

「偽装：：結婚？」

「そう。一緒に暮らすけれど、夫婦関係はなし。お互いの性的な趣味は尊重するという約束で」

淳一は安岡が英子との婚約を「取り引き関係」と言っていたことを思い出した。

「二人とも、仲のいい恋人同士を演じていたから、誰にもこのことは気づかれてないわ。デートをしたり、わざわざ二人で初詣に行ったりして……」

「……それで、僕のことを安岡に……」

「ええ、芳樹さんと私はいつの間にかいろいろ相談できるとなってきたの。ホモセクシヤル同士、わかりあえることも多くて。ちょうどその頃、彼は大学時代からつき合っていた恋人との仲がこじれて、別れた

いって言った」

「大学時代からの恋人？」

「同じ課の前田さんよ」

「えっ：：前田が！」

「やっぱりご存じなかったのね」

淳一は、安岡と前田の関係を日本の企業によくある学閥の先輩後輩関係だと思っていた。しかしそう言われてみると、二人の間には、必要以上に湿度の高い雰

困気があつたような気がする。

「前田さんて、見かけはマッチョタイプでしょ。そのくせ、性格は女性的なの。芳樹さんの好みは必ずしもそうじゃなかったから、彼のしつこさにちよつと嫌気がさしていたみたいね。それで私は、あなたのことを話してみたの。『すぐ近くに女装趣味の人がいるわよ』って。芳樹さんはすごく興味を持ったみたいだった。だから私は、アタックしてみることをすすめた。本当

のところ、私自身もあなたにすごく興味を持っていたからなんだけれど。私って、やっぱりきれいなものが好きだから」

淳一は、けっきょく自分が英子の思惑どおりに動かされていたのだという事実にも、少なからず腹が立った。しかし同時に、英子が何度も自分のことを「きれいだ」と評することで、その憤りが薄らいでいくのも感じていた。

「でも、私がそんなふうには芳樹さんを焚きつけたことで、あなたを窮地に追い込んでしまったことについては、ほんとに申し訳ないと思ってるの」

「えっ、そんなことまで……ご存じなんですか？」

「ええ……」

英子はソファを立ち、クローゼットに置いてあったポストンバッグの中から、一通の分厚い封書を取って来ると、それを淳一の前に置いた。

宛名は若山社長になっている。サービスサイズの大  
きさに角張って膨らんでいるその封筒の中身がなんで  
あるのか、淳一にはおおよその見当がついた。

「中には、写真といっしょに、ワープロ打ちの匿名の  
手紙が入ってたわ。『お前の会社の社員は、アルバイ  
トで男娼をやっている』って。自宅へ来る父宛の手紙  
は、忙しい父に代わって私が処理してるってこと、た  
ぶん前田さんは、ご存じなかったのね」

淳一は、わなわなと体が震えてくるのを押さえて、その封筒をにらみつけていた。

「父は、まだ知らないと思うわ。でも、社内ではそうとう噂になっているようね。友人の妹さんが偶然大和メデイカルに勤めていて、その人からいろいろ情報は入ってくるの」

英子は、淳一を見つめて、ひとつ大きなため息をついた。

「でも、私には芳樹さんの気持ちかわからないわ。なんで前田さんなんか、こんな写真を渡したのか。どう考えても、そんなことをするような人には思えないのよ。あなたのことを本気で好きだったみたいだし」

「?:::」

淳一は、意外そうに英子の顔を見た。

「いずれにしても、芳樹さんが帰国したら、問いただしてみれば、とりあえず、私はあなたにお詫びが

したかったの」

淳一はただ呆然と英子を見ていた。英子がいい加減なことを言っているとは思えない。しかし、その言葉をどう受けとめていいのか、困惑していた。何をどう考えていいのかわからなくなっていた。英子が次から次へと披瀝する、知らなかつた事実を咀嚼そしやくするだけで精いっぱいだったのだ。

だから、英子の次の言葉には、じゆうぶんの不意打

ちの効果があつた。

「ねえ、お願い。女装してみせて」

「……えっ」

「芳樹さんのことはそれとして、私、どうしてもあなたの女装をもう一度見たくなくなってしまったの。特にこの写真を見てからはね。本当のことを白状すると、今日のパーティー、あなたも参加するって聞いたから、来たようなもの。だから、あなたにいちばん似合いそう

なドレスを選んで来たの」

淳一は、思わず英子のドレスに見入った。

片肌の出た真っ赤なワンショルダーのイブニング。

胸のあたりは、大輪のバラのようなラッフルで飾られている。

（着てみたい……）

いちどそう思った瞬間から、淳一の心の中で閉ざされてきた水門が開かれ、その思いが体全体にあふれ出

した。

「着たいでしょ」

淳一の心の動きを見すかしたように英子が言った。

淳一は、恥ずかしそうにうなずいた。

「その前に、バスを使いたいわ」

思わず口から出たのは女言葉だった。

二ヶ月以上も女装していなかったせいで、むだ毛の

処理に時間がかかってしまった。幸い、高級リゾートホテルのスイートルームらしく、レディスシェーバーも備えられていたのには、救われたが。

最後にシャワーを浴び、バスカーテンを開けると、そこに、英子がさまざまなものを用意してくれていた。

イブニングドレスはハンガーに吊され、洗面台には、ウイッグと化粧品、それに真新しい下着類が置かれていた。

白いショーツを取り、脚を入れるとき、淳一は全身に震えを感じた。もう二度と女装はできないと諦めていただけに、その絹の下着に体が触れただけで、悦びが全身を駆けめぐったのだ。

シリコンパッドがないのは困ったが、ストラップレスブラのカップがしっかりしていたので、その中にフェースタオルを丸めて入れて、形を整えた。

メイクをし、ドレスを着て、ボリユームのあるカー

リーのウィッグをかぶる。

全体のできを確認、出て行こうとドアのノブに手をかけたところで、淳一はためらった。

自分がいま着ているのは、英子がつい先刻まで身につけていたドレス。その姿を彼女自身に見られるのだ。

無性に恥ずかしい思いがこみ上げてきた。しかし、その恥ずかしさはまた、見てほしいという気持ちの裏返しでもあった。淳一は、思いきってノブを回した。

英子は、ソファでテレビを見ていた。

「お待たせしました……」

どうしてもか細い声になってしまふ。

ソファから立ち上がった英子は、表面が光った黒い生地のパンツスーツに着替えていた。長いストレートヘアと、そのマニッシュな装いが、すつきりとりりしいシルエットを形作っている。

「きれい……」

淳一を見つめて英子が言った。

「思ったとおり、よく似合うわ。もつと、こっちへ来て」

その言葉に淳一は静かに歩を進めた。途中まで近づいたところで、まっすぐに見つめてくる英子の視線に堪えきれず、立ち止まってしまった。その視線から目をそらし、横を見やると、そこに大きな楕円の鏡がついたメーキャップテーブルがあった。

その鏡の中に淳一の腰から上がすっぽりとおさまつていた。

英子ほどには色白でないにしても、じゅうぶんにきめの細かい肩の肌が、間接照明を受けて、真っ赤なドレスと溶けあっていた。その肩の上にカーリーヘアが優しくかかっていた。

淳一は、自分の姿に思わず見とれた。気がつくとき、英子が淳一のうしろに立っていた。長身の英子は、淳

一とほぼ同じくらいの身長。目鼻だちのはっきりした美しいふたつの顔が並んで、鏡を通してお互いを見つめ合っている。

突然、英子が後ろから淳一を抱きしめた。そして、むき出しになった首筋から肩にかけて、その唇を這わせた。淳一の体が、ほんのすこし後ろにのけぞって、英子に身を預ける形となった。

英子は、淳一の体を自分の方に向かせ、その唇を塞

いだ。淳一も英子の背中に腕をまわし、抱きしめた。どちらからともなく唇を開き、舌をからめ合う。そして、口づけをかわしたままで、お互いの体をまさぐり合った。

英子の手は、淳一の体を確かめるように動き、胸からウエスト、そして腿へと伸び、ついには股間にあてられた。

その瞬間、英子の手は飛びのくように淳一の体から

離れ、唇も離れた。英子は、急にこれまで見せたことのないおどおどした上目づかいで淳一を見た。

淳一は逃げ腰の英子の体を刺激しないようにそっと支え、優しく微笑んだ。

「怖いことなんてないのよ。あたしは女の子なんだから」

淳一は股間から離れた英子の手をそつとつかみ、ふたたび静かにそこへ押しあてた。

今度は英子も落ちついたらしく、その掌を優しく上下して、ゆっくりとそこを撫で始めた。その感覚に淳一が目を閉じると、英子は短い間隔で何度もキスしてきた。そして、淳一が微笑みながらふたたび目を開けたとき、こう言った。

「私、生まれてから今日まで、あなたのことをずっと探していたのかもわからない」

二人はまた、きつく抱き合った。

そんな愛撫がどれだけ続いただろうか、二人の体が、あとすこしすればそのまま床に崩れ落ちるといふとき、淳一は、なぜか夢の中からたたき起こされるような感じがした。

「……待って」

英子の体を離れたものの、その異様な感覚の正体がしばらくの間、淳一にもつかめなかった。

「どうしたの？」

英子の声に、やっとその違和感がつけっぱなしになつていたテレビから発しているのだということに気がついた。

確か聞き覚えのある名前がテレビから聞こえてきたのだ。

淳一の視線に気づき、英子もテレビを見やった。

夜のニュースショーらしいその画面に映されていたのは……一見して刑事とわかる二人の男に両わきを抱

えられて、うつ向き加減に連行されて行く一人の男：  
：安岡だった。

「えっ！」

淳一と英子は同時に叫んだあと、テレビの声に聞き  
耳を立てた。

前半部分を聞き漏らしたので詳しい状況はわからな  
かったが、概略は次のようなことらしかった。

「昨年、安岡は国立K病院から八億円におよぶ検査機

器システムを受注した。その際、医局長との間に一千万にのぼるリベートの授受があったらしい。秘かに内偵していた警察が確証をつかみ、安岡と医局長を贈収賄容疑で逮捕した」

そのニュースが終わった後もしばらく、二人はぼんやりと画面を見ていた。テレビは、関東地方の梅雨明けが宣言されたというニュースを報じていた。

「……そうか、それでわかったわ」

英子が惚けたような口調で言った。

「海外へ出張したつて言うばかりで、パパは私にさえ、芳樹さんの行き先を教えてくれなかったの。ほんとはずっと、任意の取調べを受けていたんだわ」

部屋の電話が鳴った。たぶん、若山社長からだろう。

あわてて着替えて、メイクを落とし、人目を気にしながら英子の部屋を出た。

ロビーに降りると、大和メデイカルの社員たちがすでに帰京の準備をして集まっていた。

「いったいどこへ行ってたんだ。すぐに帰る用意をして来い」

淳一を見つけた課長が、思いきり不機嫌そうに言った。

その時、エレベーターから、苦虫を噛み潰したような顔の若山が、重役連を引き連れて降りてきた。

「谷沢君はおらんか」

いきなり若山に名前を呼ばれて、淳一は体がこわばる思いがした。

英子とのことがすでに知られているのか、それとも安岡の取調べの中で、自分の名前でも出たのか。淳一はびくびくしながら、若山に近づいた。

若山は、肩をいからせた姿勢から、一転、なぜか弱気な顔になり、こんなことを言った。

「谷沢君、悪いが君に頼みがあるんだ。安岡は仮にも英子の婚約者だった男だ。マスコミがそのことを嗅ぎつけて、英子を追いまわさんともかぎらん。すぐには東京に帰らん方が得策だと思うんだ。しばらくこのホテルに逗留させようと思う。それで君に英子のボディガードをしてほしい。こちらからオーケーを出すまで、ここに英子といっしょにいてやってくれ」

その時、淳一には、運命のスイッチがふたたびオン

に切り替わる音が聞こえた。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまでを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

## 完全版を入手する

# サンデー・ナイト・リムーバー

Sunday Night Remover

<公開版>

CopyRight 1989 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500